とある令嬢の脅迫

体験版

衣渡アンズ
きぬわたり
天宮しの
顔つきも体型もまるで女の子のような少年。高校に入ってから出会った天宮しのへの片想いから、女装してのオナニーにハマってしまう。女装オナニーはやがて趣味の一つになり、人に見せたくなってネット投稿を始めるが、それを天宮しのに気付かれてしまう。天宮しのに脅迫を受けて、性的な関係になっていく最中、衣渡アンズは自身の「才能」に気付き、開花させていく。
衣渡アンズが想いをよせる令嬢。見た目の美しさだけではなく、誰に対しても優しく、どんなときも礼節を欠かせないその姿は、学校内で「天使」と称される。実は性的な好奇心が強く、一方で男性に対する苦手意識があり、そこで「男の娘」である衣渡アンズの存在に気付き、二人きりの秘密の関係になろうと「脅迫」という形で接点を持とうとする。衣渡アンズとの関係を通して同じく自身の才能に気付き、ある夢を抱くようになる。

華園(はなぞの)まあや
ユリ
天宮しのといつも一緒にいる親友。顔つきも体型も幼く、接していると高校生とはとても思えない少女。実は天宮しのに対して性的な想いを秘めつつ、接している。すでに天宮しのと性的な関係を築いていた衣渡アンズに対して嫉妬するが、嫌ってはいないようだ。衣渡アンズとは小学生時代からの幼馴染みだが、まったく眼中になかったらしく、認識していなかった。
衣渡アンズたちより一つ年上。部員全員がレズビアンで占められている衣装部に所属し、日々熱心に活動をしている。華園まあやと親交があり、時々天宮しのに代わって「性の相手」を務めていたようだ。声量は小さいが美声の持ち主で、ユリの囁き声を聞くだけで性的な気分で高まってしまう者も多い。美巨乳で男性から目線を向けられやすいが、レズビアンなので女性にしか興味を持っていない。ただし男の娘だけは例外のようだ。

……4
第1章　衣渡アンズの秘密……5
1　女装っ子の秘密のオナニー動画鑑賞　5
2　動画投稿主の正体～女装っ子、衣渡アンズ　14
第2章　とある令嬢の脅迫……18
2　天宮しのからの脅迫　18
3　天宮しのとオナニービデオ鑑賞～天宮しのの手コキ　25
第4章　華園まあやの秘密……51
4　華園まあや視点：華園まあやと天宮しの、初めてのレズセックス。　51
第5章　秘密の登校チャレンジ……74
5　女子トイレで見知らぬ女の子に手コキしてもらう　74

第1章　衣渡アンズの秘密

1　女装っ子の秘密のオナニー動画鑑賞

パソコンを起動すると、僕は真っ先にとある動画投稿サイトを開いた。お目当ての動画は、マイページの中にある。僕は動画の説明文も再生回数も確認せず、動画を再生した。

動画ビューアが開く。映し出されたのは、画面一杯のスカートだった。黒のサテン生地のドレスで、白レースのフリルが一杯に装わされている。明らかに外行きの服ではなく、特別な時にだけ着るような服だった。

長手袋を装着した右手の指が、ゆっくりとスカートをなぞっていく。長手袋には細かな薔薇の刺繍が一杯に施され、装着している人の小さな掌と細く伸びる指先を美しく彩っていた。

そんな指先が、ゆるくゆるくスカートの下にある股間の形をなぞるようになでていく。

サテン生地とレース生地がこすれる滑らかな布ズレの音と、画面のはるか上からこぼれたため息が漏れ聞こえてくる。ため息は「ハアハア」と切なげだけど、指先の動きはそんな自分自身をじらすように、ゆるりとゆるりと速度を変えず、スカート下の股間をなでていく。

やがて左手も画面に現れ、両掌の指でスカートをなぞっていく。もう自分自身の愛撫がたまらないというように、腰をくねりくねりと回し始める。

両掌は明らかにスカート裏の鼠径部がある場所を中心に、掌全体を押さえつけるようにぐるりぐるりと三角形を描き始めた。そうしながら、股間を主張するようにやや前へと押し出す。次に掌は、股間の中心のところで指で菱形を作り、スカートの布地を一杯に引っ張った。すると菱形を作ったそこに、あるはずのない「もっこり」が浮かび上がった。「もっこり」は縦に細く長く、スカート裏に隠された形をくっきりと浮かび上がらせた。それはもう疑いようもなく、「あの形」を予感させるものだった。

両掌はいったん股間を解放し、今度はスカートをまくり上げた。その動きはゆっくりとゆっくりと、画面一杯覆うように映し出されたスカートを彩る細かなレースのおかげで、あたかも舞台を隠す緞子が上がるような効果をもたらしていた。

するとそこに現れたのは――ペニスだった。上方向に屹立した、立派に張り詰めたおちんちんだった。

僕は思わずそのおちんちんを見て溜め息を漏らした。全画面表示で一杯に映し出されたおちんちんは、決して大きくもない二〇インチモニターとはいえ、なんともいえない迫力があった。その状態だと、現実にあるどんなおちんちんよりも巨大だった。

僕自身も溜まらなくなり、ズボンを下ろし、おちんちんをしごき始めた。

画面一杯に映し出されたおちんちんはもう限界まで大きくなって、おちんちん周辺の薄皮も限界まで引っ張り、血管を浮かび上がらせていた。おちんちんの先端に備えられた亀頭(きとう)が、砲台(ほうだい)のようないかめしさを持って、画面を見る人を威嚇(いかく)するように正面を向いていた。その砲口から、じわりとオイルが漏らしていた。

もちろんおちんちんには下着が履(は)かされていた。フリルが一杯に付いた、本来的な役割を果たせるのかどうかわからない、肌が透けて見える薄いレースが一杯に施されたパンティで、しかもローライズだったからおちんちんの根元までしか隠していなかった。そのパンティの締め付けを軽々とはねのけて、おちんちんは正面を向いていた。

動画主はスカートを両掌で押さえたポーズのまま、腰回り全体が見えるようにして、ゆっくり角度を左へとずらした。おちんちんの砲口が画面中央から逸れて、砲口先端と砲身全体が同時に見える斜め四十五度の角度のところで止まった。それはおちんちんを鑑賞するにはベストな角度だった。

めくれ上がったスカートから見えるウエストは極めて細かった。まるで女性の下半身に誤っておちんちんを付けたかのような……しかしだからこそそのミスマッチはなんともいえない背徳的な怪しさを放っていた。

画面上で布ズレの音がして――どうやら姿勢を変えたらしい――右掌が画面に入ってくる。レースで覆われた右掌の指が慎重な手つきでおちんちんに触れる。人差し指で、おちんちんの根元から先端へ、慎重にすっと滑らせる。

すると意想外な接触だったみたいに、おちんちんがピクンと跳ねて、釣られて腰全体もビクッと跳ねた。その瞬間、鈴鳴り口に溜まっていたしずくが跳ねて、とろりと長い糸を引き、それが前後に揺れてやがて自分自身の股間の根元に付着した。

動画主はその粘りのある糸を指先ですくい上げると、ぬめぬめを指にまとわりつかせ、そ

の指先でおちんちんをなで始めた。指先は巧みに動き、おちんちん全体に触れないように、指先だけで前後左右ゆるりと動きつつ、さらに鈴鳴り口から次々と生成されるオイルをひろってはおちんちんにぬりたくり、次第におちんちん全体がぬらぬらした光を放ち始めた。

それでもレースで装わされた指先は、まだ二本の指先だけでしかおちんちんに触れていなかった。自分自身でこの快楽をずっと引き延ばすかのように、自分自身をもったい付けるように、いつまでもいつまでも指先だけでおちんちんをいじり、おちんちんもまるで他人の愛撫を受けているかのように、いちいちビクンビクンと跳ねていた。

ようやく指先がおちんちんの根元に狙いを定めた。細い指が陰嚢全体を包み込み、指で陰嚢全体をもみほぐすようにしながら、おちんちんの根元を人差し指と親指でしっかりマウントし、おちんちん全体の皮を引っ張ったり緩めたりした。そのたびに、おちんちんの先端が上へ下へと揺れた。陰嚢は思いのほか大きいらしく、細い指先ではわしづかみにしきれず、陰嚢の皮が指と指の隙間からこぼれていた。

動画上から聞こえてくる溜め息が、くっきりとした形を持ち始める。溜め息に「あ……あ……」という切なげな声が混じり始める。声はどう聞いても少女のもので――それが見る者

の感覚を狂わせていく。
動画を見ている僕も同じように掌全体で陰嚢を包み込み、おちんちんの皮をゆるく引っ張った。快楽に漏れる溜め息の声が、動画主の溜め息とシンクロしていく。
レースに装われた指先はいよいよおちんちん本体へと移っていく。しかしすぐにはおちんちんを握らずに、やはり五本の指先だけでおちんちんの形をなぞるように愛撫していく。
次に掌全体でおちんちんを押しつけるようにして、ゆっくり上下させる。おちんちんはお腹と掌に挟まれてしまい、そうするとおちんちん全体は見えなくなってしまうけれども、細い指先から陰嚢と、おちんちんの根元がちらちらと見えたり隠れたりする。
そうやって掌全体を上下させるごとにおちんちんがぬらぬらとオイルで輝きだし、あまったオイルが指先から漏れて糸を引き、フリル一杯のローライズパンティに染みを作っていく。
不意に、動画のおちんちんが向きを変えた。再び砲台が画面の正面に向けられた。動画主が両脚を大きく開き、ややがに股姿勢になって股間を突き出す。余計におちんちんの先端が画面の正面に強調される。そうした格好になり、四本の指と親指でおちんちんを挟むように持ち、しゅこしゅこと前後させた。

もうもったい付けず、じらさず、指先がおちんちんをちゅくちゅくと刺激させる。オイル一杯に塗りたくられたおちんちんが、指が肉の上を滑らせていく生々しい音を立て始めている。

動画上から漏れ聞こえてくる「ハア……ハア……」の声はあたかもジョギング中であるかのような速度感と切迫感をまとい始めつつ、でもそういうスポーツ的な爽やかな調子ではなく、「あ……あ……あん……気持ちいい……気持ちいい……すごく……」と淫靡なつぶやきが溜め息に混じり、自分自身ではじめた愛撫をより高めようとしているかのような、露骨な言葉が並び始める。

「ハア……ハア……ああ……おちんちん、おちんちん気持ちいい……オナニー好き……もっと、もっと僕を見て……いやらしいおちんちんを見て……もっと気持ちよくなりたい……おちんちんたまらない……おちんちん……おちんちん……ハア……ハア」

おそらく動画主は前屈みになっているのだろう。前倒しになった体がカメラに近付き、卑猥なつぶやきがしっかりとした形を持ち始める。その声もはやり少年のものとも少女のものとも付かない……ずっと声変わり前、性が分離する前にとどまっているような、しかしそん

な幼さからも程遠いような淫靡さも備えているような、なんともいえない魔的な声だった。
おちんちんをしごく指の動きはどんどんどんどんどん早くなる。フレームレートの早くないカメラが、指の動きを残像だけで捉え始める。動画主はもう我慢できないというふうに腰を引き始め、まくり上げられたスカートの裏地が画面にちらちらと見え始める。ハアハアという溜め息も早くなり、おちんちんをしごく指はもっともっととその上の快楽を求めて動き続けていた。
「ハア……ハア……ハア。気持ちいい……来る……出る……もうすぐ、もうすぐ出るよ」
動画上から聞こえてくる声が、間もなく終幕を告げ始めていた。　それに併せて、少し引き気味だった姿勢がくいっと前へ突き出された。再び画面一杯におちんちんの砲口が突き出されてくる。しかしそれは動画の最初の頃とはっきりと姿を変えていて、亀頭は真っ赤に腫れ上がり、オイルでヌルヌルとなって、もう一試合くぐり抜けたかのような壮絶な生々しさを備えていた。
動画を見ている僕もいよいよくる絶頂に備えて、椅子の座面端に尻を乗せてだらけて座っていたけど、頑張って尻に力を入れて、おちんちんの角度を上へ向けさせた。

「ハア……ハア……うっ……ああっ……イク……イク！　イクー！」

ついに来た！

真っ白な液体が放たれた。白いとろみを持ったそれは、バッと音でも出そうな勢いで放出され、一瞬にしてカメラのピントの外に飛び出していった。

ビクン！　ビクン！　ビクン！

精液の第二派、第三派が次々と放たれる。そのたびに、ペニスは上へと跳ねていった。レースで装われた指先は、先よりからは勢いを弱めたけれども、おちんちんをしごき続けていた。

すごい量だった。鈴鳴り口から放たれた精液は、ストローから吐き出された牛乳のようなくっきりとした線を作り、ビクンと跳ねるたびに次々とあふれ出させ、六度目のしゃっくりの後、ようやく勢いを失わせた。あれだけ張り詰めていたおちんちんは力を失い、その先端からだらりと、ヨダレのようなつゆ後を垂らしていた。それが思いのほか弾力があるらしく、つーっといつまでも長く伸ばしていつまでも切れなかった。

レースに装われた指先がようやく手を止めた。でもまだおちんちんに指を添えたままで、

亀頭を正面に向かせていた。「ハア……ハア……」と一〇〇メートル走を走りきったかのような呼吸が動画上から聞こえ、体全体も空気を求めて上下していた。股間周辺に、軽やかな運動の後のような汗がいくつも浮かんでいた。

そうやって右掌の指はおちんちんを掴んだまま、左掌が画面にインサートしてきて――おそらくスカートは口でくわえたのだろう。その証拠にこの瞬間呼吸の音が止まる――左掌でお別れを告げるように左右に振りつつ、右手指で掴まれたままのおちんちんも左右に振り、最後に画面にむかってぺこりと亀頭の先でお辞儀するかのように下げた。

これを最後に、動画は終了になる。画面には「オススメの関連動画」が映し出された。

2　動画投稿主の正体～女装っ子、衣渡アンズ

動画を見ていた僕も絶頂に達していた。大惨事にならないように、射精の瞬間左掌で傘を

作って、精液の放出を受け止めた。おかげで左掌は精液まみれになったし、そこからこぼれ落ちた精液でおちんちんは白くどろりとした液体でまぶされていた。すでに力を失ったおちんちんはお腹の上でぐったりと張り付き、その上に大量の精液で彩られている。こちらも結構な量で射精していた。

射精した僕も動画主のようにたったいま全力で走りきった後のような呼吸で「ハアハア……」とあえぎ、全身が脱力しきって、しかし運動した時のような虚無的な消耗感ではなく、むしろ体全体が幸福感と恍惚の残像に包まれて、この心地よさの余韻のずっと味わっていたいような気持ちになっていた。

でも、そういうわけにはいかない。精液を拭かなくちゃ。股間周辺にこぼれ落ちた精液が、間もなくお尻側に垂れようとしている。ズボンに付いちゃうと精液跡はなかなか落ちないし、椅子に付いても染みになってしまう。匂いも残ってしまう。射精後の脱力感で動きたくなかったけど、無理して体を起こし、すぐ側に用意していた箱ティッシュから何枚かつまみだし、体や掌に付いた精液を慎重に拭き取った。

精液を吸ったティッシュをゴミ箱に放り投げ――部屋に匂いが付いちゃうから、後でトイ

レに持っていって始末する予定だ――さらにアルコールで右掌を綺麗に洗浄すると、パソコンのマウスに手を置いた。

パソコンはさっきの画面から動かず、動画が終了して「オススメの関連動画」を映していた。そこからマウスのホイールをカリカリと動かし、画面を下にスクロールさせた。

すると、動画を見た人たちがコメントを残していた。

「今回も最高だった」「エロすぎてオナニーが止まらない！」「君のおちんちんにしゃぶりたい」「君のオナニーの手伝いをさせてくれ」……そんなコメントがずーっと一〇〇件近く並んでいた。動画再生数は一万越え。

僕は誇らしく感じた。なぜなら、この動画を投稿したのは僕。そして動画の中でスカートを履き、オナニーをしていたのも僕。ついでに動画を撮影したのはこの部屋だった。当然ながら、動画を投稿したのはこのパソコンだ。

こんな僕をみんなが見てくれている。僕を愛してくれて、僕に欲情してくれている。そんなコメントの数々を見ているうちに僕の気持ちは高揚していくし、次もその次もと動画を投稿していこうというモチベーションになっていた。一方で、次はもっと工夫しなくちゃ……

というプレッシャーもあるけど。

そう、今回の動画が初めてではなく、すでに投稿数は二十を数える。僕はこの界隈ではそこそこ知られるようになり、昨日投稿したこの動画も平日夜に関わらず一晩で一万越え。一定以上のファンも付いているほどで、最近の動画は六万から七万回再生くらいいくから、今回も同じくらいいくだろう。端っこだけどランキングに載りつつある。

でも……僕は憂鬱な溜息を漏らして、椅子の背にぐったりと体を預ける。

本当はこうじゃないんだ。僕が本当にしたいのは、たった一人でオナニー動画を作ることじゃなくて……本当は……。

僕は目を閉じた。脳裏に僕が本当にしたい行為を思い浮かべた。

そう、これだよ。僕がしたいのは……。

射精後で力を失っていたペニスが、むくむくと力を取り戻していく。僕は指先で、自分をじらすようにおちんちんをゆるりゆるりとなでていく。いや、この指先は僕じゃなくて、あの人の指で……。

僕はそのまま、頭に思い浮かべた妄想だけでもう二発ほど、射精した。

第2章　とある令嬢の脅迫

2　天宮しのからの脅迫

ああ、天宮しのが僕の隣に……わずか三〇センチしか離れていない場所にいる。間に学生鞄(かばん)が隔てているけど、そんなのは関係なかった。運転手はいるとはいえ、完全なる密室。天宮しのと同じ空気を吸っている。天宮しのが吐いた息を吸っている。

それを考えただけで、僕はにわかに興奮し始めた。

今だから明かそう。僕は毎日妄想し、溜まらず何度もオナニーしてしまう「本当にしたいこと」とは、天宮しのだった。天宮しのとセックスがしたい。僕は毎日毎日、いや毎時毎秒天宮しのの姿を頭に浮かべ、天宮しのとのセックスを考え、そのうちにも天宮しのになりたくなって女装オナニーを始め、そうやってとうとう女装オナニーを動画撮影して某アダルト

サイトに投稿するようになってしまった。そんな誰にも言えない秘密の遊びを始めたのは、天宮しのが好きすぎて、天宮しのとセックスしたい……が切っ掛けだった。

車は街中をどんどんと進んでいくが、僕は風景の変化を全く見なかった。だって隣に天宮しのが座っているんだから！　僕は天宮しのが隣にいる……という状況に静かに気持ちを高ぶらせ、次に毎日妄想している天宮しのとのセックスが頭の中に浮かんで、ズボンの中でおちんちんをじわじわと大きくさせていた。

今はダメ……さすがにダメだから……。

僕は大きくなりかけているおちんちんを、太ももの間にびしっと挟み込んだ。こんな場所で、うっかり股間をもっこりだけはさせまい。

そんなふうにちらちらと見ていると、ふっと天宮しのと視線がぶつかってしまった。気まずい。

天宮しのも見るからに緊張していた。姿勢は相変わらず綺麗に整っていたが、視線が一点に定まらず、どこかそわそわした空気が感じられたし、よくよく見ていると顔に汗が浮かんでいた。

しの「あ、あの、よろしいでしょうか……」
ようやくしのが口を開いた。まるで思い切ったかのような、やっと決心が付いたかのような、そんな緊張感がしのからは感じられた。
アンズ「は、はい！」
僕も緊張していたし、さらに天宮しのの緊張に飲まれるような感覚があったので、思わず変な裏声を上げてしまった。
しの「今日は突然、申し訳ありません。あの、どうしても観ていただきたいものがございまして……あの……」
しのは彼女らしくない早口になっていた。姿勢はやっぱり綺麗に整っていたけれど、珍しいくらいに落ち着きがなく、喋り終わる前に――普段の彼女なら、決してそんなことはしない――自分の学生鞄の中を探り始めた。
そうして取り出したのはスマートフォンだった。天宮しのは少し僕から視線を避けるように向こうの扉側を向いてスマートフォンを起動し、操作して、目当ての何かを探した。
しの「あの、この動画なのですが……この動画の主は、あなたですか？」

やっと探していたものを見付けたらしく、天宮しのは僕を振り返って、スマートフォンの画面を僕に向けた。

その動画を見て僕は……目の前が、いや全ての世界が真っ暗に飲み込まれるのを感じた。

スマートフォンに映し出されていたのは、つい二日前僕が某アダルトサイトに投稿した女装オナニー動画だった。小さな動画ビューアの中で、大写しになったおちんちんと、それを一生懸命くちゅくちゅと刺激させている掌が映っていた。画面からややこもり気味に漏れる溜め息は、僕の声とシンクロしていた。

アンズ「……しょ……証拠(しょうこ)は？」

反論。でも説得力がないくらい声が引っ込んでかすれていた。走行する車の音に飲み込まれて、きちんと相手に届いたかどうか怪しいくらいの声だった。

しの「あ、突然ですみません。まず太もものここにホクロがあるのが見えますか？　あなたの太ももにもありますよね。今回の動画はレースの手袋をなさっていますけど、別動画を見ると薬指の爪に割れた跡があります。今のあなたにも同じ跡がついていますよね。それから声が少し聞こえてくるのですが……」

そう言いながらしのは、動画を進めて、後半のうわごとのように「おちんちん、おちんちん」と連呼するところで音声を聞かせるように止めた。

しの「あなたの声ですよね。一般向けのソフトですが、音声分析ソフトを使って確認しましたが、一〇〇％の精度で一致しました。えっとそれから……」

そこまで早口に言葉を並べて、ようやく途切れた。天宮しのは興奮（こうふん）しているのかどうかわからないが、顔は真っ赤で、長い黒髪の隙間から見える耳も赤くなっていて、長袖のセーラー服が汗でしっとりする気配を感じた。

一方の僕は別の意味で汗を浮かべていた。全身から体温が抜け落ちたみたいに冷たくなっていた。それは誰にも知られていけない、知らせてはいけないものだった。僕の人生最大の秘密だった。それが、まさか天宮しのに知られるなんて！

僕はとっさに運転手のほうに視線を向けた。

しの「彼女なら大丈夫です。汀（みぎわ）さんは私の良き理解者ですから。ここでの出来事は決して口外いたしません。安心してください」

天宮しのは僕の視線の意味を察して、さっと言った。

そうして、すいっとほんの五センチくらい僕のほうへ顔を寄せるようにした。
しの「……衣渡(きぬわたり)さん……あなたですよね？」
天宮しのは少し間を置いて、僕を上目遣いにして、慎重な言葉遣いで僕に尋ねた。
アンズ「……」
僕は小さく、こくっと頷いた。
しの「良かったぁ！」
天宮しのはドサッとシートに体を預けた。胸に手を当てて、安堵(あんど)の溜息をもらした。そんなふうに脱力するしのを見るのは初めてだった。
しの「他にもいろいろ調べたのですよ。いけないことですけどお金を使って調査もして、この動画のIPアドレスを確かめましたし、このスカートや下着の購入履歴(こうにゅうりれき)なんかも確かめたりして……。でもすごく恐かった。もしも違っていたらどうしようって、でも勇気を出さなくちゃって、今朝からずっと気が気じゃなくて……。でもあなたで良かった……ああ、本当……」
天宮しのは緊張が解けたようにダーッと喋り始めた。しのがこんなふうに、普通の女の子

っぽく喋る姿を見るのは初めてだった。そうやって夢中になって喋る姿は例えられるものがないくらい可愛いかったけど、可愛い姿がごく三〇センチ隣で展開されているのに、僕はそんな姿を愛でられるほど気持ちが動いてなかった。

アンズ「あ、あの……」

それで僕をどうするつもりなのか……と尋ねたかったけれども、頭が回らなければ、舌も回らなかった。いったい何が起きているのか、どうしたいのか、何もわからず僕は混乱していた。

しの「あ、申し訳ございません。突然のことで衣渡(きぬわたり)さんもびっくりなさってますよね。それでは勇気を出して言いますね」

それから天宮しのは、改まるようにシートの上で姿勢を変え、シートベルトをしたままだけどできるだけ全身で僕のほうを向き、しかし切り出すのを躊躇(ためら)うように視線を下に向けた。そんな姿勢で天宮しのは二呼吸ほど間を置き、やっと決心が付いたように「うん」と喉の奥で声を上げた後、僕を上目遣いに見上げた。

しの「……あ、あの……脅迫(きょうはく)、してもよろしいでしょうか……」

言葉のはじめは力強かったけれども、尻にいけばいくほどに萎んでいった。
こんな下から目線の脅迫なんて、僕は初めてだった。

3　天宮しのとオナニービデオ鑑賞～天宮しのの手コキ

しの「どうぞ」
僕は天宮(あまみや)しのの私室に案内されて、何度目かわからない溜息をつきながら、まず天井を見上げた。高い。三メートルよりもう少し高いだろうか。
部屋全体も広く、左手の壁に個室とは思えないくらいの大きなテレビが置かれ、その手前を高級そうなソファとローテーブルが一セット取り囲んでいる。右手側は学習机と本棚が置かれ、壁際にはベッドが置かれている。正面をまっすぐ進むとドアがあり、その向こうはサンルームとなっていた。サンルームの窓の向こうに、背の高いナラの木が茂っているのが見

えた。
こう言葉だけで並べると伝わりにくいが、一〇畳を軽くこえる部屋に、これらのものが心地よいゆとりを持って配置され、落ち着いた雰囲気だがどこかしら少女らしいぬくもりとやさしさを感じさせ、説明されなくても天宮しのの部屋だ、とわかる整った品性と可愛らしさの両方が感じられる部屋だった。
天宮しのの家はいわゆるコロニアル・スタイルと呼ばれる洋屋敷だった。今風というよりやや古風なイギリス様式の洋館だ。しかし洋館らしい、これみよがしな厳(いか)めしさはなく、全体が穏やかでその場にいるだけで、いや入っただけでくつろぎたいような気持ちになる落ち着いた空間がずっと続いていた。
僕はあまりにも天宮しののことが好きだったから、密かに住所を調べ、何でもないツーリングでたまたま近くを通った、という素振りで見に来たことがあった。しかしそこで見えたのは高い門壁と、背の高いナラの木の向こうにちらと見えた白い壁と屋根だけだった。
どんな巡り合わせであれ、その天宮しのの家に入り、さらに部屋の中へと入ることができた。感激すべき場面だけど、僕はその中のあまりの浮世離(うきよばな)れした光景に、茫然として溜息を

つくばかりで、何の気の利いたコメントも浮かばなかった。
しの「あの、どうぞこちらへ。ソファに座ってください」
僕は視線を正面に向ける。しのが部屋の左手に置かれているソファに座るよう勧(すす)めていた。
アンズ「あ、はい。ごめんなさい」
僕は慌てて取り繕う。もしかしたら、少し前から「どうぞ」とやっていたかも知れない。
でも初めて入るしのの部屋に茫然としてしまって、しのの所作にしばらく注意が向かなかった。
僕はソファをテレビの真正面の位置に座り、僕が座ったのを確かめてから、しのが隣に座った。
しのが僕の五センチ隣に座っている！　なんなら制服の布が触れあうくらい側に！
僕は急に気持ちが跳ね上がるのを感じた。天宮しのがこんな側に来るなんて初めてだった。
僕は思わず息を止めて、ま隣(となり)に座ったしのをじっと見つめてしまった。
天宮しのはそんな僕の視線に気付かず、テレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。
しの「ごめんなさい、お飲み物も出さずに。まず衣渡(きぬわたり)さんに見ていただきたいものがござい

まして……」

天宮しの説明をしながら、リモコンを操作している。

僕はじっと天宮しのを見つめていた。綺麗だ……可愛い……。どんな瞬間でも、どんな角度でも、天宮しのは存在自体がアートとしか思えない造形美を湛(たた)えていた。それに、ほのかに漂(ただよ)ってくる香りのなんともいえない甘さ。

そんな天宮しのを側で見ながら、僕は再びゆるやかに勃起を始めていた。うぅ……ダメだよ……。とは思ったのは少しだけで、大きくなろうとするおちんちんを、本気で押しとどめようという理性は働かなかった。

天宮しのは操作を終えたらしく、リモコンをローテーブルに静かに置いた。それからようやく僕の目線に気付いたらしく、一瞬きょとんとした顔をして、それから恥ずかしそうな微笑みを浮かべた。

しの「あの……ビデオ、もう始まってますから。ご覧ください」

アンズ「ああ、ごめん。そうだね」

僕は姿勢を正して、テレビのほうを振り向いた。

テレビは五〇インチくらい。女の子の個室に置くテレビとしては、大きすぎるくらいだった。そんなテレビに映し出されているのは……まさにこの部屋の光景だった。この部屋の、右手奥に置かれているベッド。そのベッドを前に、天宮しの――フレームがちょうど首ところで切れていたけど、長い黒髪や体格を見れば紛れもなく彼女だった――が左手よりフレームインする。いつものセーラー服姿、いま僕の右隣にいる格好と、同じセーラー服だった。

ビデオの天宮しのは、フレームの中央位置に立つと、スカートのファスナーを下ろし、躊躇(ためら)いもなく脱いだ。パサッとスカートが足下に落ちる。現れたのはなんの飾りのない、白の木綿(もめん)パンツだった。

ビデオの天宮しのがベッドに腰を下ろす。カメラがばっちりなタイミングで下にさがり、やはりフレームが首ところで切れて顔が見えなくなっていた。どうやら後付けでトリミングしたらしい。カメラの動きに不自然な感じがあった。

天宮しのは少し体を後ろに倒し、左腕で支えるような体制に入り、腰を突き出すようにして、両脚を広げて、パンツ以外鼠径部(そけいぶ)を何も隠していない状態になった。その体制で、右掌の指を、そっと股間に沿わせた。

しの「……あっ」

溜息混じりの甘い声が漏れて、体全身をピクンと跳ねさせる。そのささいなタッチだけで、しのの体にピリッと快楽が走ったのだ。

ビデオの天宮しのは人差し指と中指だけで、股間の周りをそっとそっと円を描くようになでる。テレビの音量はやや絞り気味だったが、遠くの方で「ハア……ハア……」とあえぐ溜め息の声が聞こえてきた。

ビデオの天宮しのは股間の、間違いなく「それ」がある場所の周囲を、指でぐるりぐるりと円を描いてみせた。あたかもパンツで覆われた向こう側に、「それ」があると予感させるような動きで、なおかつそうやって自分自身をじらしているようでもあった。

次にしのは鼠径部の上方向から、ゆっくりと指を滑り込ませた。中指の腹が鼠径部の中央を捉えている。するとパンツ布に包まれたゆるやかな丘の中央が、やわらかなパンを押し込んだ時のように、そこに溝が生まれ中指を少し沈ませた。

しのの掌がそこでゆっくりと上下して、中指がそれ――オマンコの中央をしっかり押さえたまま、ゆるりゆるりと刺激した。真っ白な木綿パンツに、小さく点のような染みが現れた。

画面の奥から聞こえている「ハア……ハア……」が一回一回が空気の塊を吐き出すような重さを持ち始め、くっきりと聞こえ始めた。

……こ、これは……。

ど、どうして急にこんなのものを……。

僕は性的興奮と困惑を同時に感じた。困惑していたのに、股間のおちんちんは素直な反応をしてムクムクと面積を肥大(ひだい)させていく。でも気持ちはまだ「天宮しののオナニービデオを見ている！」と感激できるほどの素直さには行き着ききれていなかった。

ふと、目線を感じた。振り向く。

すると、天宮しのがソファからやや身を乗り出し気味にしていて、僕の顔をじっと覗き込むようにしていた。その顔にはっきりと恥じらいと、一方で不安げなものも浮かんでいた。しの「あ……ごめんなさい。どんなふうに思われるか心配だったから」

しのは一歩遅れて僕と目線が合っていることに気づき、両掌で顔を隠して僕から体ごと背けた。

アンズ「あの、どうしてこんなビデオを見せてくれたの？」

そんなしのの反応が可愛い……というほっこり気分を隠しつつ、言葉に困惑をにじませた。しの「あの、私、あなたの投稿ビデオ、たくさん見ましたから。でもそれじゃフェアじゃありませんよね。お返しの気持ちを兼ねまして……あの、私じゃなくてビデオを見ていただけませんか」

天宮しのは両掌の指で口元と鼻を隠した状態でまた僕のほうを向き、しかし喋っているうちに恥ずかしくなったらしく、うつむいてしまってビデオを見るように勧めた。

アンズ「ああ……うん」

僕はテレビ画面のほうに目を向けた。大胆なのか、慎ましいのか……とにかくそんな彼女が愛らしく思えた。

ビデオの中の天宮しのは、人差し指と中指を揃えて、パンツ越しのある一点だけを刺激し始めている。さっき中指でなぞっていた谷間の上部分。パンツ越(ご)しで何も見えないけど、明らかにいってクリトリスのある場所だ。その一点を中心に、しのは指先をすりすりすりすりと撫(な)で、時々箸休(はしやす)めのようにその場所を中心に円を描いた。

木綿パンツ全体がにわかに湿り気を帯びているように感じられた。オマンコがあるべき場

所を中心に、オイルが漏れて広がろうとしている。それが木綿パンツに点々と光沢を作り始めていた。

画面から聞こえる溜め息に「あ……あ……あ……」というなんともいえない甘い声が混じってくる。股間からせり上がってくる快感に耐えられないというように、全身を大きく上下させる。溜め息を漏らすたびに、空気を求めて胸が大きく膨らみ、セーラー服を着ているとはいえ、隠しようのない巨乳がそのたびに強調されるようだった。そしてそのたびに漏れ聞こえる「あ……あん……あん」という喘ぎ声が、ほどよい卑猥なメロディとなってオナニービデオを彩っているようだった。

しの「あ、あの、あのですね。私も投稿サイトにビデオを公開しようと思ったんです。でも私、機械の操作とかよくわからなくて、汀さんに手伝っていただいて、なんとかここまで撮影したのですが……。あの、私の、その……ビデオ、どうでしょうか。忌憚のない意見を聞かせていただけると嬉しいのですが……」

すぐ側で、天宮しのが少し抑えた声で、何度も言葉をつっかえさせながら僕に尋ねた。僕の視線はじっとビデオを見たままだったが、しのが恥ずかしそうにしている顔がありありと

浮かんで、その頭に浮かんだ表情でまた彼女を愛らしく思えてしまった。
汀(みぎわ)さん、というのはいま僕たちが座るソファの後ろに立っている女性――汀(みぎわ)メルのことだ。僕たちを乗せた車を運転していた女性。車を降りる時に姿を見たが、長身のスーツ姿の女性で、余計な世辞抜(せじぬ)きに美人だと言える女性だった。しかも、スーツ姿でも隠れようもないくらいの巨乳だ。パッと見だけの判断だけど、巨乳の天宮しのよりもさらに大きい。
その汀(みぎわ)さんは意識しないと気付かれないほどの存在感で、ソファの後ろに立ち、僕たちの様子をたぶん今も見守っているのだと思う。振り向いて見ないと、その汀(みぎわ)さんがどんな様子で、どんな表情で僕たちのこの有様を見ているのかわからないが、何となく不穏な気がして、いまここで振り向く勇気はなかった。
アンズ「う、うん……えっと」
僕はしのに答えようと、言葉を探った。
ビデオには確かに問題があった。でもその問題をどういう言葉で指摘するべきか。今この場にいる彼女を傷つけない言葉を探った。
アンズ「このビデオ、この部屋で撮影したんだよね？」

次の話題に進めるための確認だった。聞いて確かめる必要もなく、このオナニービデオが撮影されたのは僕たちが座っているソファの、数メートル後ろだ。

しの「ええ。はい」

アンズ「この部屋に、友達とか招いたことは……」

しの「ありますよ。仲のいい友人は何度も招待しています」

アンズ「あ、それじゃダメだよ。もしも知り合いが何かの拍子でこのビデオを見たら、一目で天宮さんだとわかっちゃうよ」

僕はしのの顔をまっすぐ見て、厳しくならないよう言葉をひそませ、警告した。

しの「あっ！」

しのはようやく過ちに気付いたというように声を上げた。

このオナニービデオが撮影されたのはこの部屋の中。ベッドの形、窓の形、布団の柄、何もかも完全一致だ。しのの部屋を知らなくても、ベッドの向こう側にはサンルームが映っているし、特徴的なコロニアルスタイルの彫刻装飾が見られ、特定される要素があまりにも多かった。

ビデオの中のしのの指先が、ふたたびオマンコ全体を刺激し始めている。パンツ越しに中指を谷間に沈めて、何度も上下している。指の動きが先ほどより情熱的なものを感じさせた。オマンコからあふれ出るおつゆは指先にも絡み始めて、中指がぬらぬらときらめき始めている。漏れ聞こえる溜め息は、「はあぁ……はあぁ……」と大きく塊を吐き出すようなニュアンスに変わり、それでいて一回一回が力が、というか理性がその体から抜け落ちていくように感じられた。

しの「良かった、公開してしまわなくて。ありがとうございます。あなたのような人にご指摘していただいて助かりました。注意しなくてはいけませんね」

ちらと天宮しのの顔を見る。安堵の微笑みが浮かんでいた。相変わらず可愛い。もうどんな瞬間も、可愛い、可愛いしか出てこない。じっと眺め続けても飽きが来るのか、というくらい彼女は魅力的だった。

ビデオの中の天宮しのは、今度は指の付け根でクリトリスを押さえつけて、掌を上下させつつ、中指の先でパンツ越しにヴァギナがあると思わしき場所を刺激している。当然ながらパンツの布に押し返され、中指はヴァギナの中へ入っていかない。ごく浅いところをくい、

くいっと指で押さえつけるようにしているだけだった。それでも充分な快楽が得られるらしく、ビデオの中の天宮しのは中指でヴァギナの入り口を刺激し続けていた。

ああ……大好きな女の子の真横にいて、その女の子の一番エッチな姿をビデオで見られるなんて！　これ以上に贅沢な映像体験は他に考えられなかった。

ふと僕は、妙な視線を感じる。ちらと見ると、天宮しのがやはりソファから身を乗り出すようにした体勢で、僕の股間をじっと見つめていた。

ああ、しまった！　僕は完全勃起していた。ズボンをもっこり盛り上げていたけど、それを隠すのを忘れていた。でも不思議なことに、動揺は起こらず、むしろしのに勃起しているのを悟られたい、いっそ見せつけたい気持ちのほうが強くあった……ということを今のこの瞬間気付いた。

しの「あの……そ、……えっと……勃起、されておられますか」

天宮しのがちらと僕を上目遣いに見る。口の形が言葉を探すように何度も変わって、きっと頭に浮かんだ言葉があるのだけど、それが恥ずかしさですっと口にできず、今みたいな言い方になったのだろう。

アンズ「え……うん」
僕の気持ちはどんどんと高揚して、開放的になっていたけど、しかし彼女の手前、節度をもって、少し躊躇いがちな調子を装って言った。
しの「あの……」しのはすぐに言えないらしく、言葉を飲み込んで、一瞬僕から視線を外した「触っても、よろしいでしょうか。あの、おち……ちんちん」
天宮しのはいよいよ恥ずかしさに耐えられなくなったらしく、顔を真っ赤に燃えあがらせてうつむいてしまった。言葉も萎んでいく。
アンズ「うん。いいよ」
一方の僕は、天宮しのに触ってもらいたかった。だから僕は躊躇わなく、でも彼女を驚かせないよう慎重な言葉で答え、背中をソファに預け、座面からお尻全体を前に出した。
天宮しのがソファに座った体制のまま、体を僕のほうを向けて、じっと股間のもっこりに目を落とし、そっと、慎重な手つきで股間のテントに指先を添えた。
アンズ「……はぁ！」
自分でも思いがけず声が漏れた。僕はあんな変態的なオナニービデオを一杯投稿していた

けど、実体は童貞。こんなふうに股間を誰かに触られるのは初めてだった。だから股間から思いがけない感触と感激が同時にせり上がってきて、自分でも意図しない声が出てしまった。

天宮しのも、ビックリした顔を僕に向けてきた。でもそれが快楽による声だとすぐに理解してくれたのか、再び股間に目を落とした。

天宮しのの指が、再び僕の股間に触れる。股間をふっくら盛り上げているテントに親指と人差し指と中指をそっと添えるように置き、ズボン布越しに形をなぞるようにゆっくりと指を動かしていった。

僕は二度目だったけど、天宮しのに触られて、股間をビクンと緩めに跳ねさせた。しのの指先はゆるりゆるりと、愛撫する感じではなく、ただ興味深そうに触っているだけだったけど、僕の股間は今まで体験したことのない快感に、喜びを上げていた。

しの「あの……直接……あの……その……見せていただいても……」

天宮しのが僕を見上げる。その顔が、僕とほんの一〇センチほどのところにあった。天宮しのは顔を真っ赤にして、目は涙がこぼれそうなくらいうるうるときらめいていて、汗をいくつも浮かべて前髪が額に貼り付いているし、頬にも髪の毛が何本か絡みついている。唇が

唾液(だえき)で湿ってきらきらと細かな輝きを放っていた。甘くかぐわしい匂いはフェロモンが混じっているとしかいえない官能(かんのう)を塊として感じさせ、それが僕の理性と良心という氷を炎で溶かすように感じられた。

そんな天宮しののなんともいえない表情を側にして、僕の心臓はドキドキと、いやズキズキと痛いくらいに強く跳ね踊るのを感じた。それで、僕はすぐには返事ができず、二呼吸ほど、躊躇(ためら)いの間を作ってしまった。

アンズ「い、いいよ。いいけど、でも……」

ようやくこくりと空気を飲み込んで答える。

しの「はい」

アンズ「お、おちんちんって言って。そうしないと、何を見せて欲しいかわからないよ」

これが精一杯理性を働かせて出てきた言葉だった。僕は天宮しのがあまりにも可愛くて、愛おしくて、だからその口からもっといやらしい、卑猥(ひわい)な言葉を引き出させたいというイタズラ心に捕らわれてしまっていた。

しの「はい。……では」しのはためらうようにうつむき、やはり二呼吸ほど間を置いて「あ

の、衣渡(きぬわたり)さんのおち……おちんちんを見せていただいてもよろしいでしょうか」
天宮しのが僕を見上げて、一度つっかえてしまったものの、はっきりした口調で言った。
その表情はさっきよりも情熱的に燃えあがっていて、フェロモンが極上の輝きを放っているのを感じさせた。
アンズ「いいよ」
僕は理性が吹き飛びそうな本能を感じながら、それを抑えようと声をかすれさせ、腰を縛るベルトに手を伸ばした。
すると、天宮しのの両掌が、僕の掌の上にそっと重ねられた。
しの「あの、私が……」
アンズ「うん」
天宮しのがソファから下りて、僕の側で片足立ちになると、僕のベルトを緩め、外した。
次にズボンのファスナーを下ろす。
そこでしのが一度手を止めた。
しの「あのお……私じゃなくて、ビデオのほうを見ていただきたいのですけど」

天宮しのが恥ずかしげな上目遣(うわめづか)いで僕を見上げようとするが、それでも恥ずかしいらしく僕に目線を合わせなかった。

アンズ「う、うん……」

ビデオの中の天宮しのは再び人差し指と中指を揃えて、クリトリスのある場所をこすり始めていた。指の動きはゆるやかに速くなっていき、木綿パンツをこするスリスリの音が聞こえてきた。溜め息とともに漏れる「あぁ……あぁ……」という甘い声も輪郭線を持った主張が感じられるようになり、いよいよ快感のクライマックス近付こうという予感を感じさせた。

その音に、チャカチャカとベルトを外す金具(かなぐ)の音が混じる。

僕はそう言われたけども、ちらちらと天宮しのの所作に目を向けた。

天宮しのがズボンのファスナーを下ろす。そこに現れたのはもっこり盛り上げたボクサーブリーフだった。継ぎ目のないグレーのブリーフに、肥大化した亀頭(きとう)の形がくっきりと浮かび上がり、その先端を中心にオイルがかなりの量で漏れ出していた。

天宮しのがズボンの裾に手を入れる。僕はソファに手を突いて、少しお尻を上げた。しのが丁寧にズボンを膝辺りまで下ろした。

続いて、しのがブリーフのウエストを縛るゴムに指を引っかける。僕はもう一回ソファに手を突いて、お尻を上げた。しのがゆっくりとブリーフをずり下げようとする。でもブリーフ布に亀頭が引っ掛かって、一緒に引きずられようとした。

天宮しのはあっとなって、しかしすぐにどうしていいかわからないらしい手つきをして、それからやっとブリーフの股間側の布を大きく引っ張って開いて、まず亀頭をブリーフから露出させた。ようやくブリーフを僕の太ももあたりまでずらす。

ビデオの中の天宮しのはなおもクリトリスを刺激している。木綿パンツはもうお漏らししたようにぐっしょり濡れて、しかしそれは明らかにおしっこではあり得ない光沢と粘性(ねんせい)を持ち、こすり続ける指に絡みついてピチャピチャと音を立て始めている。

僕は視線を落とした。現実の天宮しのは、僕の勃起を見て、「わぁ」と驚きと感激の溜め息を漏らしていた。

ああ、なんてことだろう！　僕は感動で正気を失いそうだった。天宮しのの部屋で、天宮しののオナニービデオを見ながら、天宮しのにおちんちんを見てもらう。僕は毎晩の妄想で天宮しのとありとあらゆるセックスシーンを思い描いてきたが、こんなシチュエーションは

一度も想定しなかった。まさか現実がこうも妄想を超えて来るなんて！

そうやってしのを見ていると、しのが僕を見上げてきた。しのが恥ずかしげに微笑みを浮かべる。

しの「……ビデオ……見てくださいね」

小さな、音量を絞ったオナニービデオにも負けてしまう声で、天宮しのが言った。

アンズ「うん」

僕は頷いて返したが、しかし目線はずっと現実の天宮しののほうに向けられていた。こんな光景、見ない方が間違っているし、彼女の声には僕を強制する力はなかった。

天宮しのが膝歩(ひざあるき)きをして僕の股間の前に入ってきた。そこで腰を下ろし、まずズボンとパンツを足首辺りまで下ろした。僕は天宮しのが触りやすいように股間を大きく開く。

僕の股間のモノは最大まで張り詰めていて、ピンと上を向いていた。すでに亀頭の先からだらだらとオイルを漏らしていて、おちんちん全体がぬらぬらと輝かせていた。

そんな僕のおちんちんの前に、天宮しのが覗き込もうと屈み込む。もうしのの小さな鼻と僕のおちんちんが数センチの距離だった。

天宮しのは僕のおちんちんに触れようと掌を近づけるが、しかしどう触れていいかわからないといったふうに、しばらく指先を宙で彷徨わせていた。それからようやく右掌の指でそっと、まるで卵より壊れやすいものをすくい上げるように、優しくおちんちんの竿部分に触れた。

アンズ「あん！」

思わず声が触れてしまった。おちんちんばかりではなく、体全体をビクンと跳ねさせてしまう。期待で敏感になりすぎているおちんちんに、そのソフトを越えたフェザータッチは逆に刺激的だった。

天宮しのは一瞬ビックリして手を引っ込めてしまった。僕は天宮しのを見下ろし、安心させるように微笑んだ。天宮しのは戸惑いを含めた苦笑いを浮かべて返してくれた。

僕はそんな天宮しのを見て、感激と確信を同時に感じていた。ああこの子、初めてなんだ。おちんちんに触れるの、初めてなんだ……僕は天宮さんにとって、初めての男の子になるんだ……と。

再び天宮しのの右手指がそっと僕のおちんちんに触れる。僕の股間は先ほどより抑制して

――というか僕自身我慢して――、おちんちんだけがピクンと反応しただけだった。
次に天宮しのは右掌でおちんちんを包むように優しく握る。さらに左手指を陰嚢にそっと添える。
しの「……こ、こうでしょうか？」
天宮しのがゆっくり右掌を上下にスライドさせはじめた。しかしその動かし方はあまりにも優しすぎだし、握り方も緩すぎて掌全体をぴったりおちんちんに密着させている感じじゃなかったし、あまりにもぎこちなさで、おちんちんを通してしのの困惑が伝わってくるようだった。
アンズ「もっと、強く握ってもいいんだよ」
その柔らかい握り方も、敏感になったおちんちんにソフトクリームを塗られているような甘い官能を感じて、「これはこれで」という気がしたけれども、でも僕は今だけは「教官」として接しようと思った。
しの「……こうでしょうか？」
しのはおちんちんを先ほどより強く握り、もっとはっきりと上下にしごき始めた。

でも、まだまだ弱かった。
アンズ「まだまだ。もっとしっかり握って。強めにコスコスしてもいいんだよ。ほら、こんな感じ」
僕はおちんちんを握るしのの掌の上から、自分の掌を被せた。掌を上下させる動きを一度止めさせ、「こんな感じだよ」と握り方を教えさせ、それからおちんちんの皮をしゅにしゅにと上下させた。
しの「こうですね？」
天宮しのがやっとわかった、というふうに、声に安心感を浮かべた。握り方や動きにもさっきよりくっきりし、もう普段僕自身がやっているオナニーに近いテンポになっていた。
飲み込みが早い。そもそも天宮しのは成績優秀、運動能力抜群。こういう方面の理解も、普通の女の子よりも早いのかも知れない。
アンズ「そう、そうだよ。いいよ」
僕はテレビ画面のほうに目を向けた。ビデオの中の天宮しのが「あ……あ……あ……」と喘いでいた。そのリズムがさっきより速くなっている。クリトリスをこする人差し指の動き

も早くなり、パンツ全体に広がったオイルはいよいよパンツの向こうに隠されていた神秘(しんぴ)の遺跡(いせき)……オマンコの立体を浮かび上がらせようとしていた。あまりにも大量のオイルを溢(あふ)れさせすぎて、その下の布団にも染みを作っていた。

ビデオの天宮しのの「あ……あ……あ……」の声に切迫感が混じり始め、もう絶頂が近いことを予感させていた。

ちらと視線を落とすと、現実の天宮しのが僕のおちんちんをコスコスと一生懸命こすっている。

ああ、僕、人生で一番の幸せな瞬間かも知れない。

僕の全身がピクピクと震えた。大好きな女の子の部屋でおちんちんを晒すという行為だけでもう胸が高鳴るのに、その女の子のオナニービデオを見ながら、その当人におちんちんをしごいてもらう。これ以上の贅沢があるだろうか。

アンズ「はあ……はあ……はあ……いいよ。いいよ。おちんちん。気持ちいい。すごく。気持ちいい……おちんちん、気持ちいいよ……おちんちん……はあ……はあ……もっと、もっと、おちんちん、こすって」

僕は息を喘がせながら、うわごとのように「おちんちん」と「気持ちいい」をつぶやき、自分の気持ちを高めさせようとした。

ビデオの中の天宮しのも「ハア……ハア……ハア」と今まさにジョギングの最中のように喘ぎ、それもスパートが近いというふうにテンポを早めさせている。

僕は何度もビデオの天宮しのと、現実の天宮しのを交互に見た。何度か現実の天宮しのと視線がぶつかった。天宮しのは顔を真っ赤にして、汗を浮かべて、視線が合うたびに恥ずかしそうだけど楽しげに微笑んで返してきた。

おちんちんを中心にした快楽は全身をくぐり抜け、間もなく快楽の波はおちんちんに集中していく。

あ、来る……！

アンズ「おちんちん、来るよ、精液出ちゃうよ、おっきいのが出る」

僕は警告のつもりで言ったけれども、大きすぎる快感に言葉がかすれてしまった。

しの「はい。どうぞイってください。私、見届けます」

しのが僕を見上げて、変わらない速度でおちんちんをコスコスと刺激し続ける。

ああ、ダメだよ、その場所にいたら……。

アンズ「で、でも……はぅっ！　……おちんちん気持ちよすぎて、ああ、ダメ……天宮さんッ……あぁ！　イク！　イク！　精液出ちゃうぅぅぅ！」

一瞬押しとどめようとした。しかしせき止め不能だった。あふれ出る精液の濁流は、理性の防壁を一瞬にして突き崩し、快楽の波が股間の根元から本体を通り抜け、一気に亀頭の先から噴水となって吹き出していった。

ドピュッ！　ドピュッ！　ドピュッ！

精液が真上に噴き出した。跳ね上がる精液は勢いが強く、一瞬は三メートルある天井にも届くかと思った。さすがにそれは錯覚だった。でもそう感じるくらい、僕を取り巻いた快楽は凄まじく、射精の解放感も凄まじいものがあった。

僕もオナリニストで毎日色んなオナニーに励んでいたけれども、間違いなく人生で一番のオナニーだった。それくらいに射精の勢いが強く、その反射で体にかえってくる快楽も大きく、それで体がえぐられると思うくらい、気持ちいいというか一瞬恐いと思うくらいのものだった。本当に人生が変わると思うくらいの最高のオナニーだった。

第４章　華園まあやの秘密

４　華園まあや視点：華園まあやと天宮しの、初めてのレズセックス。

私は思いきって、天宮しのを押し倒して、キスした。――なんて柔(やわ)らかいんだろう。柔らかくて暖かくてエッチで……ずっと唇(くちびる)を触れあわせていたかった。

私にとっても初めてのキスだった。でもそれを天宮しのに捧げられて本当に良かった。夢で終わらなくて良かった。

天宮しのの唇から離れた。興奮して変な溜め息が漏れる。改めて天宮しのの顔を見た。天宮しのは驚いたような、怯(おび)えたような顔をしていたけれど、でも拒絶する雰囲気もなく、全身をだらりとさせて、「ハアハア」と浅い呼吸をしていた。頬をゆるやかに赤く染め、汗をじわりと浮かべ、わずかに開いた唇が少し湿っていた。

……なんてエッチな顔するんだろう。私が想像で描いていた顔より、ずっとエッチで生々しくて、どこか現実感を越えているような気がして……。私は胸が高まりすぎて、自分を落ち着かせようと次にせり上がってくる息を飲み込んだ。

まあや「反抗しないんだ」

しの「驚きましたけれど……こういう関係をお誘いしたわけですから……」

天宮しのが口の端で引きつった笑顔を浮かべようとした。私を安心させようとしているのだ、とすぐにわかった。

……もう、この子ったら。やっぱり好き。

しの「まあやさん、可愛(かわい)い。私、ずっとまあやさんとこうやって触れあいたかったんです」

今度はちゃんと落ち着いた微笑みになった。天宮しのの手がすっと伸びてきて、私の頬に触れた。やわらかく、やさしい手つきで私の頬の輪郭線(りんかくせん)を撫(な)でて、おとがいのラインをなぞり、次第にうなじへと下りていく。

私はゾクゾク来た。なんなの、このやらしい手つき。ただ触って探られているだけなのに、どんどんたまらなくなる。もうダメよ。私のアソコ、キュンキュンしちゃう。

私はかすれる溜め息を漏らした。天宮しのの腰に自分の腰をゆるく押し当てた。たまらなくなっていたけれど、こすりつけるのは恥ずかしかったから、変に思われない程度にアソコを圧迫することにした。

まあや「私も、しのちゃんの体、ずっと触りたかった。毎晩、しのちゃんの裸、想像してたよ」

私も天宮しのを真似するように、頬を撫(な)でた。頬を撫でて、おとがいのラインをするりとなぞり、やがてうなじへ。

しの「まあやさんは体も可愛い。好きです」

天宮しのが喉の奥でささやかな微笑みを浮かべた。

天宮しのの指先が私の胸元にきた。私のささやかなバストの膨らみを撫で、感触を確かめる程度に指で押し込んだ。

私の指も天宮しのの胸元まで下りてきた。天宮しのの大きなバスト。私の手じゃ、きっと掴みきれない。掌で天宮しのの左のバスト全体を、大きさを確かめるように探り、軽めに鷲づかみして揉(も)んでいた。

……ハアハア……。ダメよ。恥ずかしい。欲情しているの、モロ出しの息づかいなんかしちゃって。男の子みたいって思われちゃうじゃない。

私は呼吸を飲み込んで、無理矢理に落ち着かせようとした。

まあや「ねえ、しのちゃん、気付いてる。自分の体がいやらしいって。男子も女子も、みんなアンタの体を見て、たまらなくなってるの、気付いてた？」

私は声をひそめて、悪い男のような喋り方をした。そこまでするつもりじゃなかったけれども、自分でもなんていやらしい喋り方をするんだろう、と思った。

すると天宮しのは少し複雑そうな顔をした。

しの「……はい。でも私、この体に価値を見いだしてくれているなら、少し嬉しいといいますか……」

天宮しのはゆるく、遠慮がちな微笑みを浮かべた。

しの「私はまあやさんのような、小さな体も好きです。可愛くて、抱きしめたくなります。まあやさんの体でいやらしいこと想像している人、きっとたくさんいたはずですよ。私もそうでしたから」

天宮しのが今度は私の背中に手を回してきた。セーラー服ごしに背中をするすると撫でて、お尻に触れる。

……ああ、この子、なんていやらしい触り方をするの。指先でお尻の敏感なところ……。ああ、やだ。ピリピリくる。プリーツスカートの上から触られているのに、お尻を直接触られるよりずっとエッチだ。たまらない。もっと触って。

私は無意識にお尻を突き上げていた。天宮しのの指が、すーっと私のお尻のお山を、何度も巡回していく。

しの「まあやさん、今すごく可愛い顔をしていますよ」

天宮しのが楽しげな微笑みを浮かべた。

まあや「あんただって……」

私は天宮しのの顔に自分の顔を寄せた。自分の口から漏れる、いやらしい息を押しつけるようなキスをした。今度は唇を触れあわせるだけじゃなくて、舌を押し込んだ。天宮しのも舌を突き出してきた。ぬめぬめした器官が絡み合った。天宮しのの舌はゆっくりした動きで、でも私の舌の動きを確実に捉え、いやらしい感触を跳ね返してきた。舌を絡み合わせるごと

に、ぬめりがどんどん強くなって、絡み方がエッチに感じられた。天宮しのの吐息を、口の中に直接感じた。キスしていると、いやらしい気持ちをずっと深くまで共有できるような気がした。

唇を離した。天宮しのの開いたままになっている唇の端に、唾液がとろりと垂れるのが見えた。私はとっさに口をすぼまして、垂れるヨダレをすすった。

私は視線を下に落とした。また天宮しのの胸に目を向ける。天宮しのは大きく喘ぐような呼吸をしていて、大きなバストをこれみよがしに上下させていた。それが私を誘い込んでいるように思えた。

私はセーラー服の右脇のファスナーを上げた。セーラー服上衣をぺろんとめくる。ブラジャーが現れた。ベージュで、ささやかな薔薇の刺繍が施されている。地味だけど、彼女らしい慎ましさのある、ちょうどいい可愛らしさのブラジャーだった。そのブラジャーに、天宮しののバストが窮屈そうに押し込まれていた。

私ははやる気持ちを抑えながら、まずブラジャーの上からバストを鷲づかみにして、揉んでみた。ブラジャーは意外と固い。胸の柔らかさよりも、まず刺繍の感触が掌に感じた。じ

れったいけど、むしろそうやって触っているほうが性欲が昂ぶる気がした。
私はブラジャーの下の、ワイヤーが入っているところに、無理やり指を突っ込んだ。天宮しのは胸が大きいから、少し食い込んでいる。それでも構わず指を捻り込み、ブラジャーを一気に上へずらした。
ぷるん！　乳房全体が魅惑的に弾んだ。
ああ、おっきい。すごい。想像よりもずっと綺麗だし、エッチだった。セーラー服とブラに胸の全体像が隠されちゃっていたけど、半脱ぎのこの状態のほうがエッチだった。
って、ヨダレをこぼしそうになっているのに気付いて、私は口元を拭った。危ない。変なにやけも止めなくちゃ。
しの「制服が皺だらけになってしまいますが……いいですよ。まあやさんの好きなようにしてください」
天宮しのが目をうるうると潤ませながら、官能のこもった囁き声を漏らした。
もう、そんな声で言われたら……。
私は天宮しのの胸にしゃぶりついた。乳首を口に含み、舌先でチロチロと刺激した。

しの「あっ……ああ……うん……」
天宮しのがいやらしい声を上げる。
ああ、この声を生で聞けるなんて。そんな声を出されたら、私、どんどんエッチになっちゃう。
私は天宮しのの胸を弄り続けた。掌で揉みながら、唇で乳首をつまんだり、舌で乳輪全体を舐めたり、子供みたいにちゅーちゅー吸ったりした。
ああ、おいしい。しのちゃんの胸、おいしい。甘い匂いがするよ……。
天宮しのが「ハアハア」と喘ぐような息を漏らし、胸を大きく上下させる。そのたびに、大きなバストがふわふわと揺れる感じがあった。首をひねり、官能に耐えがたいみたいに顔を左右に振った。それでも薄く細めた目はじっと私のほうから外さなかった。
ああ、可愛い。普段よりもずっと可愛い。エッチする時って、こんなに可愛い顔をするんだ。ずっと胸を弄っていたくなるじゃない。
まあや「ねえ、しのちゃん。いつから私をそんな目で見るようになってた？　いつから私を、いやらしい目で見てたの？」

でも私は気になっていたから、天宮しのの胸を鷲づかみにして、緩く揉みながら尋ねた。
しの「わからないけど……お付き合いを始めた最初の頃からですよ。可愛いなぁ、抱きたいなぁって、あなたの体でいやらしい想像をしていました。ごめんなさい」
天宮しのは少し悪戯(いたずら)っ子な微笑みを浮かべた。
まあや「ここ、弄(いじ)りながら？」
私はそこを意識させるように、股間のアソコを天宮しのの股間に押しつけ、ぐりぐりとお尻で円を描いた。
しの「はい」
天宮しのが少し恥ずかしげな、いや好色な微笑みを浮かべて頷いた。
まあや「なんだ、そうだったんだ。私の裸想像して、アソコ弄ってたんだ。ごめんね、長らく我慢(がまん)させちゃったね。しんどかったよね」
私はなんだかホッとした気持ちになり、嬉しくもなってきて、より強くアソコを押しつけた。
しの「まあやさんも、お着替えの時、いつも私の裸を見ていましたよね」

まあや「バレてた？」
しの「はい。まあやさんも……その、私でオナニー……してくれましたか」
天宮しのは恥ずかしそうに声を潜めた。その言い方が私をたまらなく興奮させる。
まあや「オナニーなんて、もうこの子ったら。ずっとしてたよ。あなたと友達になった最初の頃から。毎晩。だってあんた、すごくやらしー体してるんだもん」
私は天宮しのに顔を寄せて、その耳元で囁く声になって告白した。
やだ、言っちゃった。ついに言えちゃった。恥ずかしい。でもドキドキする。自分で言っていることに、自分でいやらしくなっちゃう。
しの「嬉しいです。お互い我慢しあっていましたね。これからはこういういやらしい関係になりましょう。私たち三人で、仲良く、エッチな自己実現を成し遂げましょう」
天宮しのが嬉しそうに微笑んで、私の両頬に両掌を添えた。
しの「三人……」
でも私は、ピクリと反応した。
しの「はい。衣渡さんも私の大切な友達です。やさしい方ですので、私のどんな無茶にも嫌

な顔を一つせず、お付き合いをしていただいています。衣渡さんのやさしさに甘えてばかりなのは心苦しく感じていますけれど、衣渡さんはきっとまあやさんを受け入れてくれます。できれば三人仲良く、この関係を深めていければと思いまして……。あの、衣渡さんは男性の方かもしてませんけど、とても可愛い方なんですよ。きっとまあやさんも……」

天宮しのは私の不機嫌を察したのか、少し早口に、諭すような調子になった。

私は一瞬にして高まった気持ちが吹き飛び、嫌悪と苛立ちに満たされた。そうだ、私はこの子にとっての「初めて」じゃないんだ。どうあがいても、私の前にはあいつがいる。私がどんなにこの子のことが好きで、思いやって、欲望を注いでも、その前にはあいつがいる。

私は振り返った。あいつはずっとそこに立って私たちを見ていた。なんだかわからない変態っぽい格好をして、チンコをたまらず勃起させ、その先端から気持ち悪い液体を垂らしてぬるぬるになっていた。そういえばあいつの格好は、あの動画の中と一緒だ。どうでもいいから、ぜんぜん気付かなかった。

仲良く……ね。いいよ。

まあや「ねえ、そこの竿の人」

私は嫌悪感たっぷりに声をかけた。
しの「あの、そういう呼び方は……」
天宮しのが慌てて訂正しようとするが、私は無視した。
まあや「なに見てんのさ、この変態。ちょっと手伝ってよ。仲間に入れてやるからさ」
しの「まあやさん！」
天宮しのが窘(たしな)めるような口調になった。私はちょっと胸が痛かったけど、もう始めてしまったから続けないわけにはいかない。
アンズ「あ、はい」
衣渡(きぬわたり)は急に声をかけられて、ビックリした声を上げていた。
まあや「ほら、しのちゃんのスカートとパンツ、下ろして。私が許可するから」
しの「まあやさん……」
私は膝をついて腰を上げ、天宮しのとの間に隙間を作った。
衣渡(きぬわたり)はおずおずと近付いてきた。下の方で、もぞもぞと何か弄る感触があった。
まあや「ほら、早くしなさい！」

アンズ「は、はい！」
しの「まあやさん、ダメです！　衣渡さん、すみません。ゆっくりで構いませんよ。気にな
さらないでください」
天宮しのが私を窘め、衣渡にやさしい口調になる。
そういうの、ちょっと傷つくなぁ……。なんでしのちゃん、あんな変態に優しくするのさ。
だんだんムカムカしてきた。
私はちょっと体を起こして、様子を見守った。紺色のスカートが脱がされ、さらに天宮し
のの太ももに白い布がするすると下りていくのが見えた。
しの「あの、まあやさんもスカートを脱いだらいかがですか？」
まあや「え、でも……」
天宮しのの突然の提案に、私が戸惑う。
ここでスカートを脱いだら、こいつにお尻見られるってことじゃない。
しの「開放的な気持ちになった方が、より気持ちいいですよ」
天宮しのが私のお尻を触れてきた。あのいやらしい触り方で、すっとお尻のお山をなぞる。

私はお尻の奥でブルブルッと感じるものがあった。もうそんな触り方をされると……直接触られたくなっちゃうじゃない。

まあや「そうね。竿の人、聞こえたよね？　ほら、早くして」

しの「まあやさん！　衣渡さん、本当にごめんなさい」

私はきつい言い方をして、お尻を上げた。

しのちゃんに窘められるのは私もキツいけど、今さら言い方変えるの、恥ずかしいじゃない。

衣渡が私のお尻を抱きかかえるように手を回してきた。……って、なんか脱がせるだけなのに触り方、やらしくない？　ファスナーを下ろし、ホックを外し、スカートを下ろした。私は左膝を上げてスカートのベルトを通してもらい、次に右膝を上げてようやく脱がせてもらった。

ああ、お尻がむき出し。隠すものがない。空気がお尻をさらさらと流れていくのを感じる。それを、特に好きでもない男に晒している。いつもは気にもしないのに、些細なことに敏感になっている。

……なにこの感触。胸がドキドキする。やめてよ私、そういうのには別に興味もないんだから。

まあや「どう？　しのちゃんのアソコ。報告しなさい。できるだけ詳しくよ！」

私は後ろを振り返り、挑発的な口調で尋ねた。衣渡（きぬわたり）が屈み込むのが見えた。私は天宮しの の顔に目を移す。

アンズ「天宮さんのオマンコは、少しひらき気味になっていて、ヒクヒクしていて、いやらしいおつゆを垂らしています。でもすごく綺麗。肌が白くて、オマンコのめくれたところがピンク色で、そこにヌルヌルしたものがついていて、すごくやらしくて、すごく綺麗で……あ、おつゆが垂れてきた」

こうやって聞いていると、男だか女だかわからない。曖昧（あいまい）な端境（はざかい）にいる声で、やたらと熱っぽく、溜め息混じりな喋り方で報告してきた。

なによ、案外かわいい声じゃない。それに言い方がやたらとネチネチしてて、聞いているとなんかモゾモゾするというか、エッチな気持ちになるというか……。

いいわ。サービスよ。

まあや「いいわよ。じゃあそこのわんこ。しのちゃんのアソコ、ペロペロしなさい」
私はまた振り返った。
アンズ「え？」
私のお尻越しに、衣渡（きぬわたり）の顔が見えた。顔を真っ赤にしながら、きょとんと間抜けな顔を見せていた。
まあや「バター犬の務（つと）めを果たしなさいって言ってるのよ」
私は声を少し苛立たせさせた。
しの「まあやさん、優しく言ってあげてください」
まあや「優しくしたわよ。わんこに対してね」
私は含むような言い方をして、自分の体を天宮しのの体の上に預けた。
天宮しのは窘（たしな）めるような顔をして、何かを言いかけたが――。
しの「あ！　……あぁ……うっ」
唐突に来た快楽に、大きな声を上げた。次に来る快楽も不意打ちだったらしく、顔を右へとよじらせた。

まあや「ダメよ、いやらしい顔、私に見せて」
私は天宮しのの両頬に手を当てて、こちらのほうへ向けさせた。天宮しのはハアハア息を喘がせ、目にうるうると涙を浮かべていた。
しの「……はぅ……ああ……うん……あっ……あっ……」
天宮しのが溜め息混じりに喘ぎ声を上げる。快感が耐えがたいみたいに首をすくめるが、でもじっと私のほうを見ていた。目を細ながらだったけど、ずっと私を見てくれていた。
ああ、たまらない。この子はなんてエッチな顔をするの。
私はベッドに投げ出されたままになっていた天宮しのの両掌に、自分の手を重ねて、しっかり指を絡めた。
しの「あっ……あっ……あっ……はぁ……」
やがて喘ぎ声も規則的(きそくてき)になってきた。天宮しのは顔を真っ赤にして、全体に汗を浮かべて、前髪を額に貼り付かせていた。
まあや「いいわよ。すごくいい顔。すごくやらしー顔してるよ」
見ているとゾクゾク来た。胸の奥で何かがせり上がってくるような気がした。単に鼓動(こどう)が

早くなるだけじゃなくて、体の内から、何かヒクヒクするような、耐えがたい欲求と幸福感が同時に迫ってきた。そのヒクヒクはお尻のほうにも広がって、私のアソコが熱を持ち、じわりとショーツを濡らす感覚があった。

それにこの匂い。天宮しのはいつもいい匂いをしていたけれど、この匂いはなんだろう。甘くて優しくて、近くで嗅いでいるとどんどんいやらしい気持ちになって……これ、ひょっとしてこの子のフェロモンなの？

天宮しのがやらしー声を出しながら、ずっと私を見てくれている。夢に見た光景だ。でも現実のほうがずっとよかった。私が思い描いていたものよりも、ずっといやらしい顔をしていた。

この顔、この瞬間を忘れないように覚えておかなくちゃ。この目を写真のようにして、一瞬でも逃さず、覚えておかなくちゃ。

まあや「いいわよ。そこまで」

私は振り返って指示を出した。衣渡（きぬわたり）が顔を上げた。目をとろんとさせて、口周りをなんだかわからないものでトロトロにさせている。

なによ、あんたも良い顔するじゃない。かわい……って何よ、可愛くないわよ！
まあや「今度はそれ、しのちゃんの中に挿れなさい。あんたももう限界なんでしょ」
アンズ「え、でも」
衣渡が戸惑うような顔をしていた。
まあや「私がいいって言ってるのよ。ほら、働いたからサービスよ。その汚いの、しのちゃんのアソコに挿れなさい」
衣渡が立ち上がった。私のお尻越しに、衣渡の勃起チンコが見えた。衣渡のチンコも真っ赤になっていて、上からとろみのある何かをかけたようにヌルヌルに濡れていた。
私はそのチンコを見て、うっと何かを感じて、目を背けた。一瞬、あのチンコをずっと見ていたい気分になっていた。それを振り払って、天宮しのの顔に注目した。
しの「……まあやさん、ダメです。衣渡さんにやさしくしてあげてください」
天宮しのは窘めようとしていたけど、その言葉に力はなく、むしろいやらしい官能的な響きに満ちていた。
まあや「優しくしてるわよ」

私はなんだかわからない気持ちのまま、なぜか取り繕うような口調になって返した。
しの「……ぅう！」
天宮しの体がひくっと引きつった。たまらないらしく、目を閉じる。
しの「はぅ……はあっ……！」
天宮しのが溜め息を漏らしながら、ゆっくりと体を反らしていく。私の体に、天宮しのの体の動きが直に伝わってきた。自分じゃないのに、「いま入っている」というのが伝わってきた。
私のお尻に、衣渡の体が押しつけてくる感じがあった。ということは、天宮しののアソコに、衣渡のチンコが全部収まった、ってことだ。
まあや「いいわよ。動きなさい」
私はちらっと目だけで衣渡のほうを見て、指示を出すと、また天宮しのを注目した。
ズッズッとベット全体が揺れる感触があった。それにあせて、天宮しのの体も前後に揺れる。揺れるたびに「あっ……あっ……」とたらない気持ちにさせる喘ぎ声を漏らした。胸が苦しそうに膨らんだり萎んだりする感触を、私の胸で感じた。衣渡の体が何度も私のお尻に

押しつけられた。
天宮しのは息を喘がせると同時に「あっ……あっ……」と声を漏らす。目に浮かんでいた涙が一粒、耳のほうに流れていった。唇はリップを塗っているかのように湿って、口の端にヨダレを浮かべ、綺麗に並んだ白い歯が見えた。その何もかもが美しくて、魅力的だった。アソコをクンニされている時よりも、数倍エロくて魅力的な顔だった。
ああ、こんな顔をするなんて。私、私……。
私は目をそらしたいような気がした。天宮しのの顔があまりにもエッチだったし、そんなエッチな目で見られると、恥ずかしいというか、何かいけないものが伝染(でんせん)してくるような、そんな気がした。
でも目をそらすことができず、むしろ魅了されてじっと見ていた。
私はさっきよりも全身がモゾモゾする何かに捕らわれるようになった。私の呼吸も、次第に落ち着かなくなって、塊のような溜息を漏らした。自分じゃないのに、自分がされているというか……次第に「されたい」という気持ちにすらなりかけていた。
やだ。ダメよ。恥ずかしい。こんなに息を荒くしたら、欲情してるって思われるじゃない。

かすかに残った羞恥心（しゅうちしん）が、自分の気持ちと体を押しとどめようとする。でもどうにも自分で自分の体はコントロールできなかった。

しの「あっ……あっ……あっ……あん！　……あっ！　……はあ」

リズミカルに続いていた喘ぎ声が乱れた。首をすくめて、もう耐えがたいというように目を閉じる。熱い溜め息が私の胸に押しつけられた。

私の気持ちも乱されるような気がした。気持ちというか理性というか。私は「ハアハア」と苦しく喘ぐような息を漏らして、天宮しのを見詰めた。

しの「あっ！　あっ！　はぁ！　……ああ……」

天宮しのが再び私を見た。その眼差しに、私はドキドキしすぎて、胸が痛くなってきた。さっきよりも何かすごいものに変わっているような気がした。

なんだろうこれ……表情自体がフェロモンなの？　この子、体だけじゃなくて顔もこんなにエッチになるの。

知らないうちに、私の口からよだれが漏れていた。たらーと垂れたヨダレが、天宮しのの顎を濡らしていた。私は気付いていたけれど、拭おうとしなかった。

しの「あっ……あっ……あっ……んん……んふ……ん……ふわぁ……」

天宮しのが目を閉じた。全身でブルブルと震えた。何かが撃ち込まれる感覚を、私のお腹にも感じた。射精されたんだ。天宮しのは射精を体に受け、その快感を全身で堪能し、満足するような溜め息を最後についた。

第5章　秘密の登校チャレンジ

5　女子トイレで見知らぬ女の子に手コキしてもらう

その後は手早く後始末をした。天宮しのとのセックスにたっぷり時間を使って僕は次が迫っていたし、天宮しのをこれ以上、学校内行方不明状態に置いておくわけにはいかない。僕はともかく、天宮しのの学校での立場に傷を付けてしまったら、僕の責任だ。

セックス後の余韻もそこそこに、急いで着替え、汚してしまった衣装をできる限り綺麗に拭い、いつの間にか汚れていた床も磨いて、できるだけ僕たちの痕跡――つまりセックスした事実――を消した。

後始末も終えて衣装部の部室を出ようというタイミングで、天宮しのが僕と向き合った。しの「まあやさんからの言付けがあります。場所は……」しのが告げたのは、僕たちの教室側

のトイレだった。「奥の個室の中で、あらかじめスカートを脱いで待っていて欲しい……とのことです」

アンズ「スカートを脱いで？」

場所が本館という指定も気になったが、僕は今日、パンツを履いてきていない。それでスカートを脱いで……ということは。

天宮しのは少し恥ずかしいことを口にするらしく、軽く頬を染めた。

しの「休み時間だけで済ませたいから、余計なものは省いて、手早く……ということらしいですので。入る時はきちんと合図をしてくださるはずですので」

天宮しのがノックする仕草をした。僕たちはこういう時のために、あらかじめ決めているサインがあった。

しの「それでは、アンズさん引き続きお楽しみください。まあやさんと仲良くしてくださいね」

天宮しのが可愛らしく首をかしげて、微笑みを浮かべた。

天宮しのが衣装部を去って行く。僕は天宮しのと一緒に部室を出るわけには行かないから、

少し時間を置いてから衣装部を出た。鞄は置き去りにした。それも衣装部の人たちに話を通してあるらしく、置いていって良いということだった。

まだ授業中の時間だ。僕はあまり人目につかないルートを使って、できるだけ靴音も立てずに移動した。掌は股間のところで何気ない感じに組み合わせて、お嬢様っぽい歩き方を装った。僕は相変わらずノーパンだったし、歩いているうちに次第に期待が高まっておちんちんがムクムクと膨らみ始めてしまったので、それをさりげなく隠すつもりで股間に掌（てのひら）を当てて歩いた。

歩いているうちに授業終了を告げるチャイムが鳴ってしまった。急がなきゃ。でもおかげで他の生徒がいる廊下を堂々と歩ける。僕は股間に手を当てて歩いているから走るわけにはいかなかったけど、できるだけ急いで指定されたトイレを目指した。

女子トイレへと入っていく。当たり前だけどトイレの中には何人かの女の子がいた。女の子達はすでに用事を終えた様子だったけれども、教室に戻らず、その場所でおしゃべりを楽しんでいた。トイレの個室は手前が一つ塞がっている。奥の個室は開いていた。

僕は指定された奥の個室に入る。華園まあやはまだ来ていない。

個室トイレのドアを閉める。ドアにもたれかかって、ふぅと溜め息を吐く。遅刻してしまったけど、華園まあやは来てくれるだろうか。いや、もう来て、帰った後なのだろうか……。

僕はスカートのポケットに入れていたスマートフォンを取り出し、一応確認する。連絡は来ていない。すれ違いの可能性があるから、「いま来た」と報告しておいた。

トイレの外で、女の子達が賑(にぎ)やかに話している。急いでいたから、ちょっと飛び込む感じで入ってきたけれど、今さらになって「女子トイレに入った」という感動がさざ波のように僕をときめかせた。前回はデパートの婦人用トイレだったが、今回は学校の女子トイレだ。しかも女の子達がすぐそこにいるという状況。ドキドキするというか、ワクワクするというか……とにかくも気持ちが高鳴った。

僕はスカートを脱いだ。もうおちんちんは太くなっていて、角度を上げつつあった。スカートを脱ごうとすると、ベルトが膨らんだ亀頭に引っ掛かるくらいになっていた。女子トイレに入ったドキドキと、これから華園まあやとトイレで密会(みっかい)するというワクワク。僕の気持ち以上におちんちんは期待で大きく膨らんでいるようだった。

僕以上におちんちんは素直で、僕が心の根で思っていることを映してくれる。いけない子

だけど、僕自身がどう思っているのか、という本当の気持ちを知らせてくれる良き相棒だった。

間もなく女の子達が去って行ったようだ。騒がしいおしゃべりが廊下のほうへと去って行く。代わりにトイレに沈黙が漂った。僕は耳を澄ませる。気配はない。他の個室に入っていた女の子も、いつの間にか出て行ったようだった。

僕はスカートを畳んで手に持ったまま、便座に座った。

空白の時間。女子トイレ特有の、かぐわしい空気を静かに堪能(たんのう)した。もしかしたら同性には感じられない、いやらしく思える空気を僕は味わう。これは男性が女子トイレに入ったからこそ体験できる心地かも知れない。

僕は目を閉じる。華園まあやの姿を浮かべる。……可愛いんだよなぁ。体は細くて、オッパイは小さいけど、それがかえって可愛らしくて、抱きしめて頬ずりしたくなっちゃう。もちろん、おちんちんでもスリスリしたくなっちゃう。あの子には、天宮しのとは違うエロスがあるんだよな……。僕のことはあまり好きじゃないみたいだけど。ああ、だから天宮しのは「仲良くしてくださいね」と別れ際に言ったのか。僕も華園まあやとないい関係になりた

い。
ふと股間が熱くなっているのに気付いた。目を開けて視線を落とす。おちんちんはもうすっかり大きくなっていて、砲台先端を便器の中ではなく扉に向けていた。これから入ってくる女の子に、精液を撃ちつける準備を整えるように。
僕は「正直なやつだな」と自分のおちんちんが愛おしくなった。おちんちんを撫でてやりたいけど、これからやってくる女の子に撫でてもらえることを期待しよう。
と、トイレに足音が入ってきた。タイルを上履き靴で軽やかに踏む音が聞こえてくる。
来た……のかな？　その靴音が華園まあやのものかわからないが、僕は胸が高鳴った。
足音はトイレの奥へ、まっすぐ僕が入っている個室の前へとやってきた。
トン・トトン・トン・トン。
ノック音。それは僕たちがあらかじめ合図として決めていたノック音だった。
来たんだ！　僕はいそいそと立ち上がり、持っていたスカートを閉じた蓋の上の起き、ドアの鍵を開ける。
そこにいたのは――知らない女の子だった。

僕はビックリして固まる。女の子もビックリして固まっていた。　沈黙の間が下りた。気まずい沈黙の間。トイレの個室で、下半身をモロ出しにした状態での鉢合わせ。これ以上気まずい状況はない。

女の子が、ふっと視線を下に落とす。そこにあったのは、僕の勃起したおちんちん。あ、まずい！

そう思ったところに、トイレ外から気配がした。女の子の一団が、トイレに入ってこようとしていた。

女の子はあっとなり、個室の中へ入ってきた。僕はうろたえた。なんで入ってきた？　どういうつもりだろう？

女の子は僕を壁に押しつけると、僕の口を掌で塞いだ。

女の子「こんな状況、他の子に見られたくないでしょ。声出さないで。いい？」

女の子が僕の側で囁いた。

すごく綺麗な声だった。囁き声だからウイスパーな感じになるのは当たり前だけど、そうじゃなくてもっと耳の奥に入ってくるというか、それで聞いている人の気持ちを溶かすとい

うか……そんな魅力のある声だった。

トイレに入ってきた女の子達は、そのうちの二人は個室に入っていったが、残りはその手前でおしゃべりをしていた。そのおしゃべりの音に混じって、おしっこが洋式便所の水たまりに落ちる音が聞こえてきた。

楽しげな対話と笑い声がトイレを満たしている。でも僕は変な感じだった。知らない女の子と一緒に個室の中で隠れていて、しかもおちんちん丸出しのまま。僕も色んなシチュエーションを妄想してオナニーしていたけれど、こんなのは想像を越えていた。

僕は息を潜めながら、すぐ側にいる女の子を観察した。よくよく見ると、綺麗な子だった。綺麗に整った顔、目は切れ長だけどキツさを感じず、むしろ穏やかそうな印象がある。前髪が長く、目が隠れかけている。落ち着いたたたずまいは、いかにも優等生という感じ。地味な黒縁眼鏡（くろぶちめがね）で、長い髪を太めの一つ結びにしている。明らかに美人なのに、目立たないように装っているような印象というか、だからこそ穏やかそうな雰囲気が姿から現れているというか……。

それから……すごくオッパイが大きかった。セーラー服の上からでもはっきりと隠しよう

のないボリュームで張り出していた。
女の子は僕を壁に押しつけるように密着し、僕の口を掌で塞ぎ、外でおしゃべりしている女の子達を警戒している。そういう体制だから、嫌でも僕の胸に、女の子の大きすぎるオッパイを押しつける体勢になっていて、そのオッパイが僕の胸で形が崩れる感覚まではっきりと伝わってきた。
この子……すごくエッチだよ。
僕の意識は次第に外の女の子から、目の前のオッパイへと向けられていった。それに、いい匂い。なんて甘くて、やさしそうな匂いをさせているんだろう。この距離で匂いを感じると、何かたまらないというか、女の子に気持ちがグラついてしまう気がしてしまった。
僕のおちんちんは知らない女の子に発見されたショックで一度は勢いを失っていたが、次第にムクムクと角度を持ち上げ、間もなく僕に邪(よこしま)な欲求を促すようになっていた。
ああ、ダメだよ。今はダメだよ。
勃起したおちんちんの先端は、偶然にも女の子のスカートに触れる。プリーツスカート特有の、さらさらとしたヒダが僕のおちんちんを柔らかく撫でていく。

そうすると、僕もこらえられなかった。僕は腰をゆっくり動かし、勃起したおちんちんをプリーツスカートにこすりつけた。亀頭の先端だけを、スカート布地のさらさらしたところにスリスリとこすりつける。

こ、これは、偶然たまたまおちんちんが触れちゃっただけだから……。僕の意思じゃなくて、無意識のうちに先っぽが当たっちゃったはずだから……。

僕は心の中で言い訳しつつ、亀頭の先端で女の子のプリーツスカートをつんつんと探っていた。

ふと女の子が視線を落とした。自分のスカートに押しつけてくるおちんちんに目を向ける。

ああ、しまった！　終わりだ！

僕の胸に絶望が降り注いだ。

女の子は僕を上目遣いに見て、ささやかに微笑んだ。

女の子「君、悪い子だね」

その声が低く、なんともいえないいやらしい響きが込められていた。その声と言い方が、僕のおちんちんを引っ込めさせるどころか、むしろ欲望を刺激してしまっていた。

授業終了を告げるチャイムが鳴った。用を済ませた後もおしゃべりをしていた女の子達が、あっとなってパタパタとトイレを出て行こうとする。

が、そのうちの一人が引き返してきて、僕たちが入っている個室の前へやってきた。ドアを軽くノックする。

女の子「大丈夫？　もうすぐ授業だよ」

少し気を遣う声だった。声だけでいい子そう、というのが伝わってきた。

どうしよう？　すると僕を押さえ込んでいた女の子が、僕の口を解放し、親指でドアの外を示した。

アンズ「ご、ごめんなさい。具合が悪くて。心配しないで」

僕は声を作る必要もなく、動揺で震えていた。

女の子「そう。無理そうだったら保健室行くんだよ」

女の子はやっぱり良い子そうな感じで、トイレにこもる僕を心配して、その後、急いでトイレを出て行った。

やっとトイレに沈黙が戻ってきた。気配を探ってもそこにいるのは僕たち二人だけ。

僕たちは二人で安堵（あんど）の溜め息を漏らした。
女の子が僕を振り向く。
だけど何も言わない。綺麗で整った顔。でもどこかミステリアスというか、その辺の女の子という野暮（やぼ）ったさはなく、ひょっとしてどこか由緒正しい出身じゃないかという気品がどこかにあるのに、しかし装（よそお）いは地味で、とにかく由来不明の怪しさが漂（ただよ）っているように感じた。
女の子「君、声も女の子なんだ」
もう声を潜めていない。きっと普通の喋り声だ。なのに女の子の声は囁くようなウイスパーで、聞いていると耳が心地よくなるような穏やかさがあって……とにかくもすごく綺麗な声だった。
アンズ「う、うん」
僕は動揺して返事をする。女の子のあまりにも綺麗な顔と声と、それからエッチな体とか、状況とか……とにかくも気持ちを乱す要素が一杯ありすぎだった。
女の子「それで、こんなところで何をしていたの？」

女の子が首をかしげる。
……か、可愛い。綺麗(きれい)な顔でそんな仕草をされると、なにかたまらない気分になる。
女の子「女子トイレでこんな格好をして入って、ここ、こんなふうにして……何をしようとしていたのか、報告して欲しいなぁ～」
やっぱり綺麗な声だった。少し低く、囁くようなウイスパー。ああ、なんでこの子は普通の喋り声もこんなにエッチなんだ。
アンズ「そ、それは……」
僕は困り果てた。天宮しのや華園まあやの名前を挙げては絶対にいけない。僕一人の思いつきでこういうことをしているという設定で話をしなければならない。でもすぐに頭が回らず、というか気持ちがエッチなほうへ傾いていてしまって考えがまとまらなかった。
女の子は視線を落とす。視線の先には僕の勃起したおちんちん。女の子の掌が僕のおちんちんを触ろうと……。
アンズ「うん！」
さらりと触れられて、僕は敏感(びんかん)に腰ごとピクンとさせた。

女の子「君、すごく敏感なんだね。こんなに可愛い顔をしているのに、君、相当スケベでしょ」

女の子はイタズラな笑いを口の端に浮かべる。やっぱりいい声だ。こんないい声でエッチな言葉が出てくると、それだけでたまらない……。

女の子の掌(てのひら)が再び僕のおちんちんに伸び、そっと触れる。やっぱりおちんちんはピクリと跳ねたけれど、それほど大袈裟(おおげさ)ではなく、女の子も構わずおちんちんを握った。

女の子は僕のおちんちんを緩(ゆる)く握(にぎ)り、緩く前後させ始める。二センチくらいのストロークで、ゆっくりおちんちんの皮をシコシコとさせる。

おちんちんを刺激させるにしては緩すぎでストロークも短め。だけどこんな状況で見知らぬ美少女にしごかれて、僕の意識や思考はあっという間に溶けていきそうになった。

女の子「何か言って欲しいなぁ。私、君を助けてあげて、今はこうしておちんちんに気持ちいいことをしてあげてるのに、何もコメントなしっていうのは、寂(さび)しいかなぁ」

やっぱりいい声。そんな声で「おちんちん」なんて単語が出てきてドキドキしてしまう。

アンズ「あ、あの……えっと」

女の子「うん？」
女の子がまた首をかしげる。ああ、可愛い！
僕は何か言わなくちゃと口を開くけれど、何を喋(しゃべ)っていいかわからなかったし、目の前の女の子があまりに可愛い姿を見せるので、思考が飛んでしまった。
僕は女の子の顔と、未だに僕の胸に押しつけられたままの大きなオッパイを交互に見る。
女の子「また胸を見た。君は本当にこらえ性のないスケベなんだね」
女の子は低く呟くような、やはりいい声で僕を責(せ)めた。
アンズ「ち、違うよ……」
僕は否定した。でも何に対する否定なのか、自分で口にしていてもわからなかった。
女の子「うん？　何が？　何に対して違うなの？」
女の子は幼児(ようじ)に対して言うように、甘くゆっくりとしたテンポで畳みかける。
僕はその言葉責めとおちんちんへの刺激で「ハアハア」喘いでしまって、答えを返せなかった。
すると女の子が、あっと何かに気付いたような顔をした。

女の子「ああそうか。君は人のせいにするつもりなんだ。セーラー服を着てトイレの個室でおちんちんをこんなに大きくしているの、他の誰かのせいにするつもりだったんだ」
女の子はいい声で、僕をネチネチと、なんともいやらしい含(ふく)みを込めて囁(ささや)いてくる。
アンズ「そ、そうじゃなくて……」
僕の頭は混乱状態だったけれど、ぶんぶん横に振った。わずかに残っていた理性が、何があっても僕を天宮しのと華園まあやから遠ざけようとした。
ああ、もう何から説明すればいいかわからない。どういう経緯(けい い)でおちんちん丸出し状態で女子トイレにいたのかとか、どうしていま勃起してしまっているのとか……。いったいどう説明すれば相手を納得させられるのか、考えつかなかった。それに……こんな可愛くてオッパイの大きな女の子におちんちんをシコシコされて、頭がまるで回らなかった。
女の子「そんな君には、罰を与えなくちゃいけないね」
女の子の体が僕から離れた。トイレの鍵を解除する。そして……。
キィと扉が内側に開いた。外の光と空気が個室の中に入ってくる。もう授業が始まっている時間なのはわかっていたけれど、僕は「はぁぁ……」と溜息を漏らしてドキドキを高めた。

女の子は、低く囁くような声で「うふふ」と微笑んだ。
女の子「君、本当にスケベなんだね。ドアを開けた瞬間、おちんちんがビクンとしてたよ」
女の子が僕を上目遣いにして、少しイタズラっぽい言い方をした。
女の子の頬が緩やかに赤く染まりかけている。あの頬の感じが何を示しているのかわかる。女の子も発情しかけているのだ。
女の子は「ほら、こっちにおいで」と僕のおちんちんを掴んだ体制のまま、トイレの個室から出ようとした。僕は少し抵抗するような素振りは見せたが、気持ちは女の子に従いたい、この女の子ともっといやらしいことをしたいという思いに傾いていたので、あっさりと女の子と一緒に個室の外に出た。
僕はトイレの二番目と三番目の間の壁に背中を押しつけられる格好になった。女の子が僕の前に立ち、さっきみたいに胸を密着させて、僕がもたれかかっている壁に左肘を置き、右掌は僕のおちんちんを掴んでシコシコし続けた。
僕の目の前には綺麗に整った女の子の顔があった。じわりと頬を赤くして、少しイタズラな微笑みを浮かべている。視線を落とすと、大きなバストが僕の胸に押し当てられ、むぎゅ

っと形が崩れる感じがあった。
視線を外のほうに向けると、そこから廊下を見ることができた。ということは、廊下からも覗き込めば今の僕たちの状況を見ることができる。もしも誰かがトイレの前を通り過ぎたら、それだけで……。
もう授業が始まっているとはいえ、廊下を挟んだ向こうの教室でのさざめきが、ひそひそとトイレの中まで聞こえてきていた。状況のせいか、心境のせいか、そのさざめき音がぐっと近くに聞こえた。廊下からたれ込んでくる冷たい空気が僕の腰をひんやりと撫でていく。でもその危うさと冷たさが、どういうわけか僕の腰をたまらなく興奮させていた。
女の子「君、本当に可愛い顔をしているね。顔とか体の形とか……でもおちんちんはすごく大きくって、不思議な感じがするね」
女の子がなんでもないふうに話しかけてきた。少し感心したような、でもいやらしい含みがあるように思えた。
僕は外に注意が向いていたが、はっと女の子に視線を向ける。
アンズ「えっと……あの……ありがとう」

僕はなんだかわからないが、お礼を言ってしまっていた。
女の子は声を潜めて、笑い声を上げた。
女の子「可愛いって言われると嬉しいタイプなんだ。……ねえ、教えてよ。君は普段からこういうことを想像して、一人エッチするの？」
女の子はぐっと僕に顔を寄せて、声を潜ませる。女の子の声は、側で囁かれるとより魅力的な力を発する。やさしくて穏やかな気持ちにさせるそんな囁き声でいやらしい言葉を呟かれると、僕は堪らなくなる。
僕はコクコクと頷いた。
アンズ「僕、いつも、いやらしいこと考えて、一杯オナニーして、でもぜんぜん治まらなくてずっとずっとモヤモヤしていて、それで……」
僕はハアハアと喘ぐ息を飲み込んで、かすれる声で、時々上擦らせながら話した。
女の子「そう、それでとうとう我慢できなくなって、女装して登校して、おちんちんこんなに大きくしたまま女子トイレの個室に入ってたんだ」
女の子が僕の片言日本語みたいな言葉を引き継いで、吐息を僕の頬に押し当てるような言

い方で問いかけた。
アンズ「うん、そうだよ……」
僕はこくりと頷いた。この設定なら、話が天宮しのや華園まあやに向けられる心配はない。僕一人恥をかけばいい。僕一人で思いついて始めた、ということにして話を進めることにした。
女の子「へえ。じゃあいろいろ教えてよ。他にどういうところでそういう想像をして一人エッチしてたの？」
女の子は興味を持った、というふうに目を細めて、質問を重ねてくる。
アンズ「あの……廊下で。こんなふうに授業中で人がいなくなった時に、こっそり女の子と相互オナニーをするって……そういう……」
僕はちらと廊下のほうを見て、口から熱い溜め息をこぼしながら説明した。恥ずかしい話だけど、こういうネタのストックは山ほどあった。毎日、色んな場所で色んな女の子とエッチする妄想していた。当然、トイレで女の子と女装してエッチする妄想もその中にあった。だから今、その夢が突然に叶っていたことになる。でも、それがあまりにも唐突すぎて、気

持ちが追いつけていなかった。
女の子はずっとゆるゆると僕のおちんちんをしごき続けている。相変わらず緩く握られ、二センチ程度のストロークでシコシコとしている。緩すぎる。でもやたらと敏感になっている僕のおちんちんは、それで充分というように次第に先端からオイルを漏らし始めていた。
女の子は僕のおちんちんから漏れたオイルが指につくのに気付いて、一度おちんちんから手を離した。掌を何度かひっくり返してみて、「へえ」と掌についたぬめりを珍しげに見る。
女の子は僕に微笑みかけて、再びおちんちんを握った。
女の子「可哀想(かわいそう)な子。ちゃんと相手がいたら、こんなことしなくても済んだのにね。うん？違うか。うっかり相手がいたら、学校のあちこちでエッチを始めちゃうか。可哀想(かわいそう)だから、私が気持ちよくしてあげるね」
女の子は僕に顔を寄せて、いい声で囁(ささや)く。ウイスパーの中に、少しずついやらしい響きが混じってくる。
アンズ「あ……あ……」
何か答えようと思うけど、僕の口からは溜め息ばかりが漏れた。

女の子「ねえ、変態くん。どうかな、おちんちん。もっとこうしてほしいっていうのはある？」
アンズ「もうちょっと……強めに握って欲しいです」
僕は恥ずかしさに目を閉じてしまった。
女の子「ちゃんと要望は出すんだ。やっぱり君はスケベだね。いいよ。嫌いじゃないから。君、可愛いから言うとおりにしてあげる。……これくらい？」
女の子はおちんちんを握る力を少し強めに、シコシコする前後の動きも大きくなった。
アンズ「うん、それくらいでいいよ」
本当はまだ緩かったけれども、さすがにそれはわがままますぎると思って遠慮した。それに状況のせいかおちんちんがやたらと敏感になっていて、それくらいの刺激でも充分だった。そのかわりに、僕は女の子の手の動きに合わせて、腰をカクカクと前後し始めた。
女の子「ごめんね。私もおちんちん触るの初めてだから、自分で触る方が気持ちいいよね。いま何分目くらい？」
女の子はちょっと済まなさそうにして、さっきよりも僕に崩れかかってきて、唇が触れちゃうかもというくらい接近した。吐息が僕の鼻に触れたし、囁き声の奥が湿っているのが克明

に伝わってきた。彼女の口臭も、やっぱり甘くていやらしい感じがした。
アンズ「いまやっと七分目(ななふんめ)くらい」
僕はまるでジョギングの最中みたいな呼吸をしながら答える。もちろん、射精まであとどれくらい、という意味だ。
女の子「まだ結構あるね。何か話題ある？　もっとエッチな気分になりたいなぁ」
女の子は少しくつろぐような声で言った。
アンズ「それじゃ……」
僕の目線は女の子の胸に落ちる。
女の子「好きなの？　胸？」
女の子が首をかしげる。僕はコクコクと頷いた。
僕はそれを了解と見て、掌を上げた。
女の子「ダメ。触っちゃダメだよ」
女の子がやんわりと拒否する。僕は動揺した。
アンズ「どうして？」

女の子「なぜって……君、こんな変態な格好で女子トイレに忍び込んで、女の子の胸を触った……それは危ないんじゃないかな。私、かばえないな、そういうことをする子は」
アンズ「え、でも……」
女の子「え？　これ？　これは私が勝手にしているだけだから。そうだね。さっきたまたま君のおちんちんが私のスカートに当たってたみたいに、たまたま手を置いたところにおちんちんがあった。……そうだよね」
女の子は同意を求めるように言って首をかしげる。
アンズ「そう……なの？」
僕は気持ちよさで訳がわからなくなって、吐息混じりの声を漏らした。
女の子「でもそれじゃ可哀想（かわいそう）だから……ちょっとだけオマケしてあげるね」
女の子は囁くように言って、さらに一歩、僕のほうへにじり寄った。僕の胸にオッパイを強く押しつけ、僕の胸にこすりつけるように下へ滑り、また上へ這い上がってきた。
セーラー服ごしにオッパイの柔らかい感触をくっきりと感じた。布同士がこすれる感じ、その向こうのブラジャーのカップがあって、そのカップと厚い脂肪の塊の形がずれる感じま

でがありありと伝わってきた。
アンズ「……ああ」
僕はたまらず喜びの溜め息を漏らした。胸の奥が震える感じがあった。女の子に掴まれているおちんちんもビクビクッと震えた。
女の子「おっと。九分目(きゅうぶんめ)くらいまで来たかな。調子はどう？　そろそろイキそう？」
女の子は僕にオッパイをこすりつけながら、囁く声で尋ねる。
アンズ「うん、もうすぐ、もうすぐ来るよ。精液出るよ」
僕は上擦(うわず)った声で、早口に答えた。
女の子「じゃあ私も協力するよ。もう我慢できなくなった、という時はちゃんとおねだりするんだよ。一番いやらしい言い方で私に射精の許可を求めるんだよ。もしできなかったら……」
女の子は一度、パッとおちんちんを離した。つまり、寸止めするよ、ということだ。
アンズ「う、うん」
僕は頷いた。

女の子がおちんちんを再び握って、さっきよりも強く、早くしごいた。もう女の子の掌をオイルでヌルヌルに濡らしていて、シャフトをしごくたびにちゅにちゅにちゅにちゅにといやらしい音を立てていた。僕も自分で腰を振って、より快楽を求めた。

僕はあまりにも気持ちよくて細くなる目で女の子の顔をじっと見詰めた。女の子は頬をじわり赤くして、綺麗に澄んでいるけど、どこかいやらしく感じる目でじっと僕を見ている。そういう綺麗な顔で、綺麗な目で見られながら卑猥なことをされるのが堪らなかった。

女の子「いい顔するね、君。いま一番いい顔してるよ。すごく可愛いよ」

女の子は目を細めて、満足げな微笑みを浮かべた。

僕の全身がピクピクと震えた。予兆を感じて、フライング気味の快楽が僕の全身一杯に広がる。

アンズ「ああ、もうイキそう。僕のいやらしい変態おちんちんから精液が出ちゃう。お願い、君の綺麗な手で僕の変態おちんちんを強くシコシコして！　僕を射精させて、変態の天国に連れてって！」

僕はハアハアと息を漏らしながら、射精を寸前で我慢しつつ、とにかくその時に思いつい

た変態ワードを囁き声で連ねた。
女の子「いいよ、変態くん。いいアピールだよ。イキなさい。見ていてあげるから、私の手でイキなさい！」
女の子が僕の耳の側で、吐息混じりの声で囁く。女の子の手がより勢いを増して、おちんちんをコスコスと刺激する。
アンズ「イク！　イク！　イッちゃう！　精液一杯でちゃう！！」
どぴゅ！　どぴゅ！　どぴゅ！　どぴゅ！
ものすごい量だった。白い粘液が鮮やかすぎる放物線を描き、飛び散っていった。精液の先端は向かい側の壁まで勢いを失わず飛び、ベチャッと音を立てて貼り付いた。二発目、三発目の精液も勢いよく噴き出し、女子トイレの壁と床タイルにいくつものくっきりとした線を作っていく。さらに飛び散った精液が点々と、あちこちに染み付けていった。